

三、教室の窓

一、プレハブ教室雑感

～五年生土田担任 太田 恭子～

「いい匂い」と、ほおに手を当てて思わずつぶやいた。ここは、五年三組の教室。新しい匂いでいっぱいだ。黒板・教壇・教卓・机・ロッカー。そして、ピカピカの床と壁。まさしく「新校舎」だ。春風に誘われて揺れ動く新芽の香りと、不思議に解け合っている。

子供たちが帰宅した後の新教室ではらく陶酔していたが、ふと、我に返り、今日、子供たちと過ごしたことを思い出してみた。新しい教室・新しい友達・新しい先生に緊張と期待ではち切れそうだった。

鉢植の花に水をそそぐA子。丁寧に黒板を消すO男。床をこしこし磨くH子。腕白坊主のK男がランドセルをロッカーに入れたり出したっている。

「先生、今までよりも幅は狭いけど、奥行きがあつて広いよ。」

「体育館シューズが一番奥に入れるといいよ。」
うれしそうに報告に来る。

「ねえ、みんな。運動場に一番近いから、しっかり遊べるぞ。」というN男の言葉がきっかけとなって、プレハブ談議に花が咲き始めた。5年
「そうだ、地震の時はすぐ逃げ出せる。」「職員室に近いから都合がいいよ。」「歩くと、床がキュッキュッと鳴る。」「そうじをすぐ光ってくる。」「でも、夏は暑いって聞いたよ。」「だから、扇風機がついているじゃあないか。」「テレビがないよ。もう、見れないのかあ。」新鮮な子供たちの感想が次々飛び出して来る。

「もうすぐ、新品のテレビが入りますよ。」私のはさんだ言葉に、ほっとした子供たちが出した「結論」は、「何もかもが新しく、最高にいい。」であった。こうした子供たちの新鮮な気持を大切にしながら、私自信がつねに初心に返り一歩ずつ確実に前進をしていきたい。

散り始めた、校庭の桜を見ながら、これからの一年をがんばらねばと誓った。



5年 羽原美恵子

二、給食大好き

～一年生担任 高橋由美子～

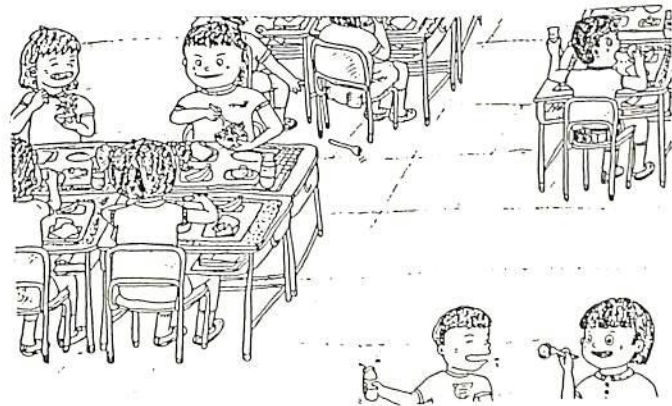
桜の花が散っていくのにつれ、一年生の緊張感も次第にほぐれ、どのクラスにも活気が出てきた。

他学年の給食風景を目の当たりにしながら、下校する一年生の中には、「今日はシチューみたいなおいがするよ。先生、ぼくたちはいつから給食が食べれるの？」と、心待ちにしている子も多かった。

いよいよ、入学以来三週間目にして、一年生の給食が始まった。今年から、お母さん方に、テーブルクロスを作って頂いた。リースや刺しゅうをあしらった、かわいらしいテーブルクロス、その一枚で食卓がとても華やかになり、食欲をそそる。しかし、給食を食べるまでがひと苦労。当番の子が大きな食缶をえっちらこっちらとさけて来て、配膳が始まる。自分のご飯もつけたことがない子たちが、ご飯つぶを手につけながら、みんなの食器につけている。

初日は、とれぐらい食べられるか分からないので、少なめにしておいた。ところが、こちらの心配をよそに、「先生、おかわりをしてもいい？」
と言いながら、みるみるうちに食缶はからになっていた。

二日目は、子どもたちの大好物のカレーライス。



河合 友子

「先生、学校のカレーには、いろんなものが入ってるね。グリーンピースもあるよ。」

「あんまりからくなっておいしいね。」

などと言いながら、ほくほく顔で食べていた。

そんな子どもたちを見ると、たくましさを感じると共に、悪戦苦闘の給食指導の疲れをほんのひととき忘れさせてくれる。中には、食が細くて、なかなかのどを通らない子もいるが、皆、時間までに一生懸命に食べている。その子たちも、「給食がきらいなの」と聞くと

「好きだよ。がんばって食べるもん。」

と答えてくれる。うれしい限りだ。

当分の間、準備から片づけまで一時間はかかるけれど、その時間も次第に短くなっていくことだろう。食べっぷりのいい一年生のことから……。

教職に就いて、今回が最初の一年生担任となった河合友子先生も、こんなことを言っていた。

給食が始まって、たっぷりと余裕をもって、十一時ずっと前に支度を始めた。十一時半には、食べ始めていたのに、なぜか、全員食べ終わったら十二時を過ぎていた。え？！一時間もかかるの！。

私はとても驚いた。とくにおしゃべりをするわけでもないのに……。これから、四時間目はほとんど給食の時間になりそうだ。どの子も『明日は何が食べれるのか？？』と楽しみにしているようだ。

五月のゴールデンウィークも終わり、再び、学校給食が始まった。

五月十日(火) スバゲティーサラダ えびドーナッツ 乳酸菌飲料 十一日(水) こもくきんびらごはん いかフライ のりたまふりかけ

三、教師と子どもとの距離を思う

（二年生担任 可知 喜久子）

「では、テレビ放送の学級紹介は希望の多かった劇とクイズをやることにします。」

本校の伝統ともなってきた「学級紹介」の集会在、今年度から校内のテレビ放送で行なわれることになった。私の学級が、そのトップバッターとして出演することになり、クラスの子どもたちが学級会で出した結論である。

一、二年生では、教師がある程度内容を決めてやらなければいけない場合が多い。しかし、中学年の仲間入りをした三年生の子たちは、どうも自分たちだけの力でつくり上げようとしている。だが、果たして、うまくいくだろうか。劇といっても、あら筋もあいまいなまま終ってしまうのではなからうか。

「ちょっと、待って。」

こう、言いかけて、私はあわてて口をつぐんだ。がまん、がまん。もう少し、子どもたちに任せてみよう、こう思ったからである。

「結果よりも、過程を大切にしたい。」

先日、学校を訪れた、学級会など特別活動の分野の指導で素晴らしい成果を上げてきた先生が、こんなことを言われたことも思い出す。

テレビ放送を見られる全校の子たちには悪いけれど、この際、子どもたち自身がみんなで協力してやりとげる学級づくりに挑戦させてみようと考えた。それから、放送当日までは、わずかな期間しかなかった。日が近づくにつれて、子どもたちは担任の私に頼ろうとする。

「テレビに写るのはみんな。先生は写らないよ。」

と、知らん顔を決めた。

そのうちに、子どもたちは、授業後に教室に残っては、台本やかえ歌を作って練習を始めた。声の大きい子が、小さい子の分まで出そう

とがんばっていた。下校後の教室黒板に「先生、ちゃんとれんしゅうできました。」と書き残して帰るのを見て、一人にっこりしてしまった。

こんな中で、「登校拒否を考える」講演会に参加した。そして、この登校拒否は人間関係の不調を原因として発生することが多いのを知った。しかも、こうした不調は急激な環境変化の見られる一学期に多いということも話された。講演を聞きながら、私は、自分の学級の子どもたちの活動ぶりを思い出していた。

子ども同士、そして、子どもと教師がほどよい距離を保ち、いい関係にあるかどうかを考えながら学級紹介に取り組む子どもたちを思い浮かべていた。

学級紹介の準備活動は、かなりもたついていた。でも、当日は元気いっぱいできて、子どもたちは大満足であった。劇のすじも、心配していた通りはつきりしなかったし、胸の名札もよく見えなかった。しかし、彼らにとって、そんなことはどうでもよいことだ。クイズの問題を声を合わせて言えたことの方がうれしいのだ。

放映が終了後の教室は、にこにこ顔でいっぱいだった。

今回の体験は、小さなことに過ぎないかも知れないけれど、この積み重ねを大事にしたいと思う。子ども自身で考え、助け合って、ものごとを作り上げていくことの持つ大きな意味に気づいていってほしい。

「おはようございますー」

今日もまた、学級全員がそろった朝の教室で、校訓「力いっぱい」を目指す営みが始まった。



3年 三石 周作

四、サンバイ ブルジュンバ ラギ

(また会いましょう)

〜 四年生土担任 松野 加代子

六月の初めころから、学級会で「インドネシア青年公務員交流歓迎会」について話し合ってきた。「クッキーをあげたい」「ポスターをあげたい」などプレゼントしたい子。「日本語を教えてあげたい」「日本の劇をしたい」と、日本語を教えた子。「ハンカチ落としをしたい」「おそ松君音頭のおどりをしたい」と、いっしょに遊びたい子。実に子どもたちの発想は豊かだった。「何にしようか」と内容をしばっていく中で、お金のこと、プレゼントのこと、言葉のことなどが問題になった。

「歓迎は物より心」という校長先生のご指導を子どもたちに伝え、更に、話し合いを進めた結果、「七夕のようなことをやろう」ということに決まった。

さて、いよいよ、係り分担任である。人数や男女の制限をせず、「自分のやってみてみたいことをやろう」と、準備作業に入っていく。そして、本番の七月六日がやってきた。さあ、始まりだ。

「スラムット ダタン」(よくいらっしやいました)

「スラムット バギ」(おはようございます)

ぎこちないインドネシア語であいさつをすませ、今度は、子どもたちの自己紹介である。

「ナマ サヤ ミキヤ」(わたしは幹也です)

「アナタハ ミキヤ サンデスカ」

子どもとムルシッドさんの間で、こんな会話が次々と交わされ、スマートなふれあいに驚くばかり。続いて、両手の握手が始まった。

「やわらかい手」

「あたたかい手」

「やさしい手」

子どもたちの叫びにも似た感激の声、声。

七夕かざり、くす玉割りと順調にプログラムが進んでいき、難問と思われていた「七夕の話・お星さまの話」となった。

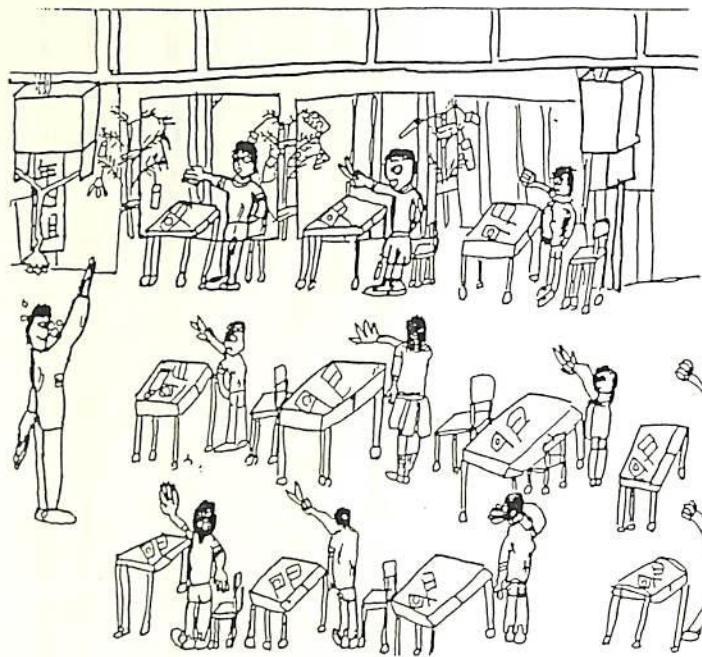
日本語など通じているわけもないのに、ムルシッドさんは真剣に見て下さった。子どもたちも、すっかり調子にのって満足そうであった。

ジャンケンゲームなどは一番の盛り上がりを見せた。グーチョコキ パーを教えたら、どういうわけか、一本指や二本指のジャンケンが飛び出して、子どもたちは拍手喝采。

学級の歓迎会の終わりになって、ムルシッドさんから突然、話しかけられてしまった。

「ヤットカメ」

という言葉だった。一瞬、インドネシア語かな、それとも英



4年 小島 賢士

語かな、日本語かなと迷ってしまった。もしかして、名古屋の「ヤットカメ」かもしれないなと、子どもたちと大さわざをしてしまった。

とうとう、お別れの時刻がきてしまい、子どもたちはお見送り用に作った両国の国旗にサインをしてもらったりした。

「インドネシアの旗にはムルシッドさんのサイン、日本の旗には自分の名前を書いた」

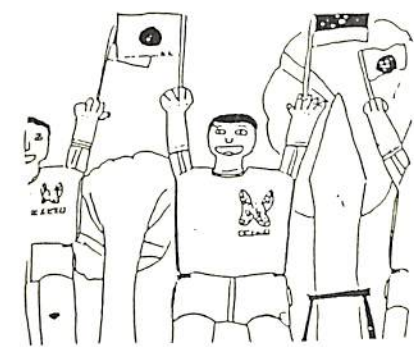
「サイン入りの国旗は私の宝物にする」

「ぜったい、自分の部屋にかざしておく」

子どもたちは、校門から去っていくバスが見えなくなるまで、小旗をふって別れを惜しんだ。

あつという間の三時間であったが、この日のことを子どもたちは一生忘れないことだろう。素晴らしい「国際理解」のひとつだったと思う。

サンバイ ブルジュンバ ラギ(また会いましょう)



4年 鎌倉 聖悟

五、今夏最高の汗を流した部活動

（十八年生担任 青山 静夫）

「今年のソフト部は優勝できそうじゃん。」

水泳部の顧問からソフト部へとかわった四月。昨年からレギュラーとして試合に出場していた子たちの多いソフト部の新チームだ。バレー・サッカー・バスケットに続けとはかり学校中の期待を担って出発した。

（とは言っても、そんなに簡単に岡崎一になれるわけじゃないからな）そう思って、初めてソフト部の子たちの練習を見た時、予期していた以上に上手な子どもたちに驚いた。

「今年は本当にいけるかも知れんね。」

「せめて、二つくらいは勝ちたいな。」

ソフト部の牽引車としてここまで育ててきた河合先生と気合いの入った話を交わす。

そして、いよいよ、練習試合が始まった。最初の美合小学校、続く緑丘小学校との試合ではコールドに近い勢いで大勝！こうして、ますます気合いが入ってきた。

「もっと強いチームと練習試合をして、速球を打つ練習や外野の守備練習もしていこう。」

好成績のスタートにおごらず、常に反省し、新たな課題をもって練習に取り組んできた。続く、「強豪」六名小学校、竜美丘小学校との合は負けこそはすれ、実力伯仲の好ゲームができた。

ピッチャーも今年になって、メキメキ調子を上げてきたH君に加え、根石小学校との練習試合ではI君もなかなかのピッチングを見せてくれた。それに刺激されてか、コンントロールの定まらなかったT君も、ひそかに自分で練習したのだから、ストライクがどんどん決まるよ

うになってきた。

「ほどほどに投げられるピッチャーが三、四人いるし、相手に応じていろいろなメンバードいけそうだね。」

と、会話に余裕も出てきた。好守備、好バッティング、それに加えて選手層の厚さがチームの自慢材料になってきた。ところが、練習試合を重ねるにつれて、チームの弱点が開始された。フォアボール、暴投エラーによる失点。リードされるたびに、声が出なくなり、ムードが沈滞して、自滅してしまう。

更に、試合が一週間前と迫って、最悪なことに故障者が続出した。

ピッチャーのH君、外野手のS君がひじ痛。O君はねんざ。チームの雰囲気もだんだん暗くなってきた。

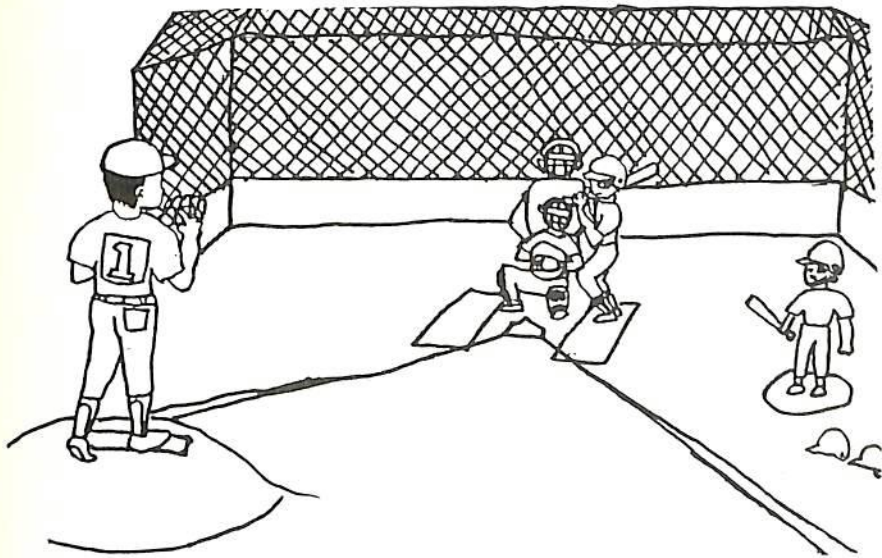
しかし、ここであきらめてしまっってはしょうがない。ピッチャーはエースのI君一本、セカンドにU君、ライトにY君を入れ、大会までのわずかな時間、猛練習を始めた。U君もY君もやる気は満々。しかし動きの方は今一歩。試合前日まで猛練習が続いた。

「もっと速く動いて！」

「送球をもっと速く！」

チームメイトからも厳しい声が飛ぶ！少年団でも猛特訓！

「明日はがんばろうな！」



6年 杉山 龍也

そして迎えた大会当日。心配なのはピッチャーの調子。しかし、私たちの心配をよそに、この日のI君は好調だ。いよいよ、プレーボール。

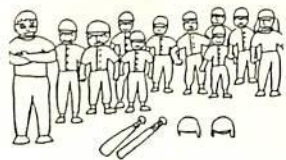
一回、ツーアウトから、いつものようにミスが出て三点を失った。いつもなら、ここで、しゅんとしてしまうところだが、何よりもうれしいことに、今日はみんなの気合いが違う。二回、三回と一点ずつを返して三対二と一点差に迫った。二回からは守りも固く失点はない。セカンドのU君を抜けた打球をライトのY君がライトゴロにしとめた。

この日、初出場のY君が緊張するチームメイトを助けるプレーが二度三度と続く。いやが上にもチームのムードは盛り上がり上がっていく。一点をリードされながら、ベンチはまるで勝ったかのような勢いだ。

試合が後半になって、U君、Y君と連続ヒット！打った本人もベース上でガッツポーズ！最終回にも、ノーアウトフルベースのチャンスを迎えた！

バッターはI君。ここまで自分が好投してきた上、チームナンバーワンの強打者。一打同点を期してヒッティングに出た。結果は、続く四番五番までが連続三振！惜しくも一点差の敗北が決まってしまった。

けれど、Y君、U君の活躍、I君の好投、そして、全員が気合いの入った試合ができたことが何よりうれしい。子どもたちにとっても、監督の私たちにとっても、この日の汗がこの夏最高の気持ちよい汗になるだろう！



6年 杉山 龍也

六、二年生の夏休み

（二年生担任 小林 明子）

「おはようございます。」

元気な挨拶で二学期が始まった。

「けがをしたり、病気をしたりした子はいないかな。」

「ほく、熱が出たよ。」

「わたしは、お腹をこわしちゃった。」

「足を切っちゃった。」

始業式の後、教室での会話がはずむ。

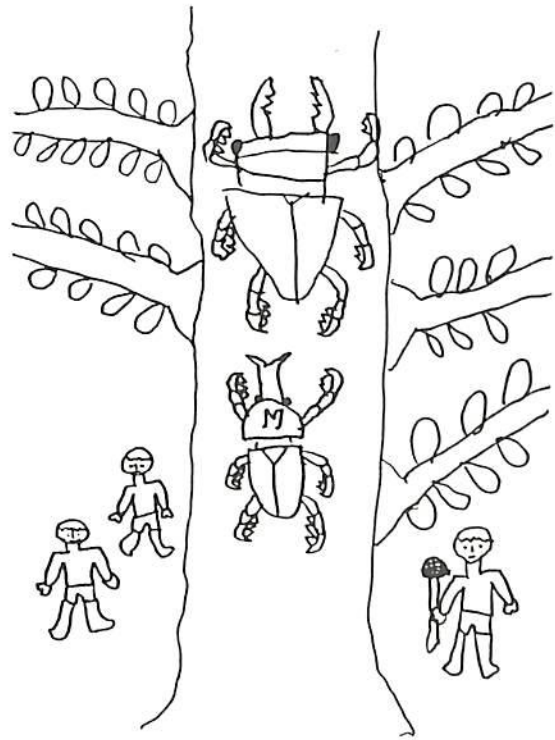
「そう、でも、今日は元気だから、もう大丈夫だね。」

と、話しかけると、可愛い顔がにっこりとほころぶ。

楽しかった夏休みの思い出を一人ひとり発表し合って二学期の第一日目が終わった。

「明日も元気に来ようね。」

子どもたちが下校した後、どんな夏休みだったのかと、日記や日誌を読み、宿題に目を通す。



2年 天野 睦大

・計算問題を毎日やった子

・たくさん本を読んだ子

・細かいところまで気を配って工作をした子

・自分で決めたお手伝いを忘れずにした子

どの子もよく頑張っている。中には、八月末にあわてて仕上げたなどと思われる作品もあるが、にこにこ顔で元気いっぱい登校してきたか
ら目をつぶろう。

そんな中で、おやっとな気がつくことがある。親戚の家に、自分一人か兄弟だけで泊まってきたよという日記がちらほら。

「おかあさんは、はたらいっているの、いつもおひるごはんはおにいちゃんを作ってくれました。やさしいおにいちゃんです。」
と書かれた作文の一節。

「入院している親戚の人を見舞うため、数日間、一人でしっかりお留守番をしてくれました。」
と、お母さんからの手紙もある。

文章には表われないけれど、自力で課題に取り組んだ子。

一年生の頃とは一味違った、子どもたちのたくましい夏休みを感じた。



「庭にくる小鳥」より（上地町 小須田正子作）

七、タイの子どもと土地つ子

— 二二年生担任 鈴木 尚子 —

タイランドTHAILAND……

この国の名を耳にすると、私は非常な郷愁と一種独特な憧憬の念にかられずにはいられない。タイは私が初めて居住した異郷の地であり人生の機微を教えてくれたところでもある。ベトナム上空を通過したと思えば、もうラオスの山々が見えてくる。心地よいプランデーの酔いが醒める頃、バンコク・ドムアン空港へ到着する。

三年前、タラップから降りていった私を迎えてくれたのは、肌に痛いほど差し込む南国の太陽だった。その陽差しの強さに目まいがしたが、(まだ見ぬ人々との出会いがこれから始まる。)と思うと、急に全身の力が湧き出て青空を仰ぎ見た。

赴任後、毎日のように下痢の洗礼を受けて閉口したが、日一日と滞在を重ねるにつれて、私はタイの生活が、タイの自然が、タイの人々がひどく気に入ってしまった。

ある日、東北タイへ車を走らせた。タイの田舎を訪れる時は、タイ人と同行するに限る。それは、タイの人々の素顔や生活を目にするこ
とができるから。幸い、旅好きな私には、旅好きなタイ人が寄ってきた。ビルマとの国境付近の景観を味わおうと思えば、パスポート不要のタイ人の中に混じり、タイ人らしい顔をしたものを言わなければ入国OKである。(タイ語を話すとすぐに外国人とバレてしまうから)
この日もタイ人達との暖かいふれあいを求めて旅立った。

バンコクを出ると、地平線まで水田が続く。車が北へ進むにつれて畑が多くなる。畑では水牛が畝を作り、屈強な男たちが裸の黒い背中に光らせて水牛に鞭を入れている。よく見ると、タピオカ(いもの一種)畑には、何人かの子供もいる。数人の大人を除いて、みんな裸足で働いている。

作業中に足を切った女性がいたが、彼女は血を流しながらも傷に唾をつけて、そのまま働き続けていた。
薬もなく、破傷風になるかどうかは、ひとえに彼らたちの運と体力にかかっている。

作業をしている子供たちは十才くらいから十四才くらいまで。

一番年下の子が九才だった。

「学校へ行かないの?」
と聞くと、

「もう行っていない。」
と答えてくる。

ほとんどの子供は、小学校を卒業した時点で働いているが中には小学校さえ途中でやめていく子もいるらしい。

学校をやめると、一人前の労働力として見なされる。

「学校と畑仕事どちらがおもしろい?」

「ちょっと暗い顔で一人が答えてくる。

「学校の方がおもしろいよ。」

ほかの子にも聞いてみる。

「学校へ行きたいけれど……。」

「どうして行かないの?」



3年 羽原 昌子

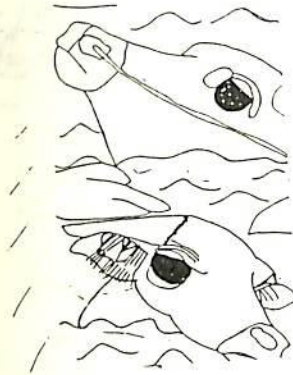
「父さんも母さんも学校へ行かせてくれないから……。」

休憩も取らずに黙々と働き続ける。その勤勉な姿は、素晴らしいものだった。

クワで土を掘り起していると、時折、小さな野ねずみが飛び出して来る。ある子供はカメレオンの穴を掘り起し、それを何匹も捕まえてポケットにねじ込んでいた。赤い腹のカメレオンを手にはいっばい持ち、得意げに見せてくれる。これは、家に持ち帰って、おかずにするそつだ。やがて、陽が落ち、地平線の向こうにかすかに明るさが残っている頃、一日の労働を終えた子供たちは私たちに明るい笑顔を残して家路を急いだ。私は彼らの明るい笑顔に、何かある底力を感じた。そして、農業国・タイは彼らでもっているという実感に包まれた。

私は、ふと日本の子供たちのことを思い浮かべた。新聞を広げると、小・中学生の自殺、校内暴力、登校拒否の数々。日本の子供たちは子供らしい生活圏を奪われてしまったのだろうか。子供らしさを失ってしまったのだろうか。

こうして、多くの不安を抱いて帰国した私であるが、土地っ子を見たときに、その不安は吹き飛んでしまった。実に素直で、人なつこい。カメレオンや野ねずみはないが、ヤギがいる。チャボもいる。そして、それを抱いて無邪気に喜んでいる子供たちを見ると、発展途上国・タイ国の子供たちと同様に、動物とのふれあい、土とのふれあいがいかに大切かを教えてくれる。心がぐんぐん育っている。経済大国・日本の将来を担ってくれる土地っ子にも、明るい希望が持てそうだ。大きく、世界へ翔け土地っ子。



3年 三石 直和

八、仏壇作りを学習して

（五年生担任 名倉 嘉章）

「この仏壇いったいいくらすると思う。」

こんな質問から、社会科の学習『伝統的な工業―三河仏壇―』の学習が始まりました。黒塗りの重厚さに加え、金箔ががたくさん使われていることもあり、子どもたちからは百万円から五百万円までの予想金額が出されました。高さ二メートル、幅一メートルほど。教室の黒板のおよそ半分の大きさの仏壇の価格予想です。

「黒板の半分の大きさで数千万円だって。」

子どもたちの驚きの声が教室に響きました。なぜそんなにも値段が高いのか納得が出来ないといった様子です。それも道理、教える側の私でさえつい最近まで疑問に思っていたことなのですから……。

「うちの家だって、そんなにもしないぜ。」

「生きてる人間が住んでいる所より、死んだ人の住んでいる所のほうが高いなんてはずがない。」

どよめきのあと、子どもたちがその秘密を探ろうと考え始めました。道具が純金で出来ているのではとか、宝石が入っているのではと想像の世界は広がっていきます。

「これは実際に工場へ行って聞いてこなくちゃわからないよ。」

「そうだそうだ、見学に連れて行ってよ。」

校外で学習できるかもしれないとあって、子どもたちも必死です。

あっという間に五十以上の質問項目がいきなり出来上がりまし

た。教室を出て本物の社会とかかわって学習できることが、子どもたちにとってこれほどまでに魅力があるものかと、改めて知らされた思いです。

いよいよ待ちに待った見学の日です。大規模工場をそれまで学習してきた子どもたちにとって、イメージとはほどとおい小さな工場です。少し落胆の色が広がったと思った瞬間、入り口の見事な白木の彫刻が子どもたちを迎えました。

「すごい。これこんな小さなところまで彫ってある。」

「このままでも、売れるよね。」

子どもたちは、三河仏壇の特徴の一つでもある、見事な彫刻の素晴らしさに圧倒されて、言葉も出ません。

下地場では『とのこぬり』の体験をさせてもらい、子どもたちは大感激。

漆塗り場では、『かぶれの危険もかえりみず?』工場長の方の説明を熱心に記録しています。

「漆って黒いけど、もともとはミルクの色なんだって。」

「耳掻き一杯しか取れないから、貴重なんだな。」

発見はさらに続きます。

工場から移動して、店のほうでは三河仏壇の荘厳さをいっそう際立たせる、金箔押しも体験させてもらいました。漆がきれいに塗られた



5年 田中 順一

細かな彫刻の上に、薄い金箔をそっとのせることの難しかったこと。大事な工程であるにもかかわらず、体験できたことに大感激。

店の方にはこちらから用意した五十をこえる質問にも、一つずつ丁寧に答えていただきました。また感激。帰りには本物の金箔と線香、ジュースまでいただいて、またまた感激。まさに感激のダメ押しといったところです。

学校に戻って『仏壇づくり』の学習をさっそく進めています。毎時間あのままな感激のシーンがよみがえります。体験に基づいた学習を進めていくのは、子どもたちにとっても私たち教師にとっても、楽しいものです。今、子どもたちの『見学マル秘ノート』の中にはそんな記録がいっぱいつまっています。

伝統的な工業は、後継者難、原材料の枯渇など、様々な問題を抱えていると言われています。見学前の子どもたちの意識も、「伝統的な工業は、衰えていく一方だ。」

という意見が、確かに多くありました。しかし見学を通して、伝統的な工業を守り続ける人々とその心に触れ、子どもたちの考えは変わっていききました。

「機械化されていく今の世の中だからこそ、こうした伝統的な工芸品の良さがあるんだろう。」

「将来的に見て、確かに苦しいかもしれない。だからといって絶対なくしてはいけない。」

そういった子どもたちの変容に、大・大・大感激の『仏壇づくり』の学習になりました。

見学に協力していただいた『ぬし市』仏壇店に感謝して

あと一か月で今学期も終わります。次の見学への夢を子供たちと語り合いながら、プレハブ教室での授業を楽しんでいるこの頃です。

九、社会見学で見た子どもたちの目の輝き

（二年生担任 松本 博子）

「さあ、今日から『パン工場ではたらく人たち』のところを勉強するよ。」
 社会の授業で、子どもたちに第一声を発しました。すると、返ってきた声が、
 「先生、パン屋さんへは、いつ行くの。」
 「パンがもらえるでしょう。」
 と、パン工場の見学Ⅱ（イコール）パンをもらうことと単純に考えています。
 二年生は社会科では、「パン工場ではたらく人たち」を学習する場合、働く人々を
 実際に自分の目で見なければ、本当の学習にはなりません。この二年生の学習に限らず、社会科では、本で学ぶことに加えて、その場
 に行き、自分の目で見て、自分でやってみる現地学習が大切な教科です。



2年 小山 泰平

「パンをもらう」ことを目的として社会見学を考えている子どもたちに、働く人々に関心をも
 って現地に臨ませたいと考えました。
 簡単に買い求められるパンを、子どもたちは自分の手で作ることがあるのでしょうか。学級で聞いてみると、家で作ったことのある子は五人。さらに、自分でパン生地をこねて形づくりまでしたことのある子はただ一人でした。
 残りの三十二人は、パンの材料も、作り方も全く知りませんでした。何となく、パンの作り方を頭の中の知識だけで知っているというのが現実の子どもたちでした。

そこで、早速、パン作りを子どもと一緒にやることにしました。この目的は、パンの材料や作り方を
 知ること、パンを作ることの難しさを学習することです。このことが理解できれば、自分たちがパン作りで困ったこと、難しかったことを工場の人はどのように工夫して

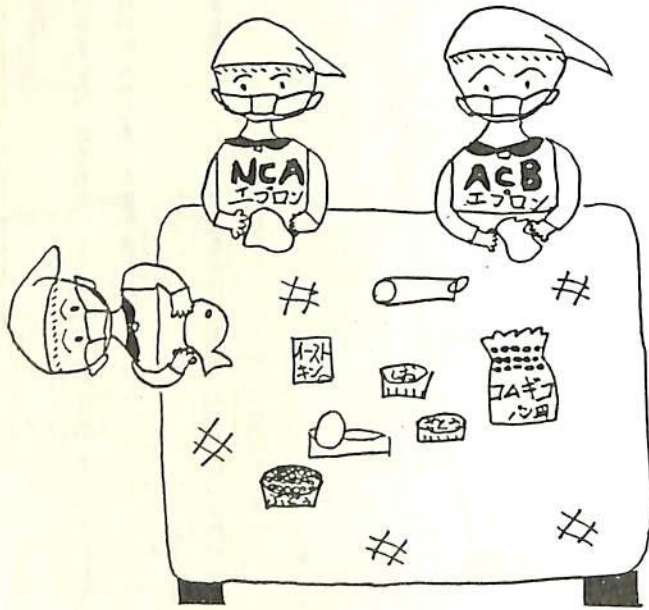
おいしいパンを作るのかという目的をもって社会見学に出かけられるのではないのでしょうか。
 パン作りについての子どもたちの作文では、パン作りにびっくりし、楽しかったという感想とともに次のように、その難しさを書いた子がたくさんいました。

きょう、パン作りでした。と中までは先生に作ってもらいました。そして、ほくたちは形作りだけやりました。でも、なかなかできませんでした。いっしょうけんめいやったら、なんとかできました。でも、さいごは、くちやくちやになってしまいました。

（たけし）

そして、いよいよ、待ちに待った十一月八日の社会見学。駅の見学でも、見るだけでなく職員さんに質問する子までいました。

次に行った「オカザキパン工場」では、たくさんのメロンパンがベルトコンベアーにのって、あつという間にでき上がってしまふことに驚きました。そして、働く人たちの手さばきの早さにとれて、見学の足が進みません。工場長さんに、再三のご注意を受けた程でした。見学後の作文では、次のように感心させられるものばかりでした。



2年 落合登輝子

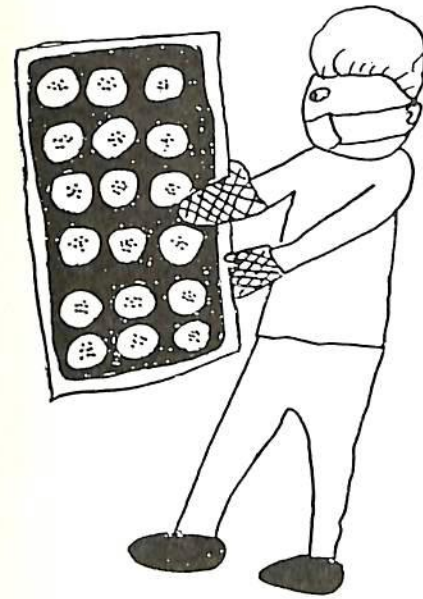
オカザキパンの中に入ったら、ブーンといいにおいがしてきました。
 おばさんたちは、パンが早くくるので、つきつきに形を作っていました。とてもあつそうでした。顔には、あせがながれていて、とてもしんけんにやっています。わたしは、「あつくて、たいへんだなあ」と思いました。
 ほくたちよりも、とても早くパンの形を作っていて、すごいなあと思いました。マスクをかけたおじさんたちは、ひたいにあせをにじませながら、一秒間にパンののっているつばんを三回もひっくりかえます。ものすごいスピードなので、びっくりしてしまいました。
 (まさえ)
 (あつし)

自分たちのパン作りと比べて、働く人を見ることができずもいたのです。

事前に興味を引き出し、関心を高めて社会見学に出かけたことが、現地での学習をいっそう有意義なものにすることができました。

教室で、教科書だけで学習する子どもたちの目にはない、「輝き」を発見することができました。

時間のかかる現地学習でしたが、これからも、としどし授業に取り入れていきたいと思えます。



2年 村松 佑子

十、三学期の係決め

～四年生担任 鶴田 秀幸～

「明日は、三学期の新しい係を決めます。」

三学期に入った二日目のことである。

そして次の日の朝、

「先生、また同じ係やるからね。メンバーがふえるかもしれないよ。」

子供たちは、希望に満ちあふれているようです。

「さてそれでは、係を決めたいと思います。どんな係を、やってみたいですか。」

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」
 ものすごい勢いで手が上がる。まるで電信柱が、林立しているようである。

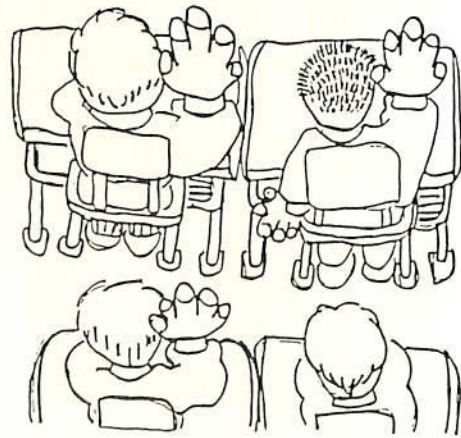
「あおい号係がやりたいです。」

「保健係がいいです。」

「おわらい係です。」

「先生、いくつやってもいいの。」

「うん、やりたい係をどんどんやればいいよ。」



4年 鈴木 庸平



二つ、三つと自分に仕事を課していく姿……

(お、えらくはりきっているな) 子供たちの意気込みに圧倒され、担任の私の方が嬉しくなってくる。そして、次の十四の係が決定した。

おつたえ係、ギャグ係、なんでもきれい係、女子病院係、けいじ係、青井君係、オリンピック係、せいとん係、けしけし係ゆうびんちゃん係、電気係、勉強係、ボーボー新聞係、給食係

なかなかユニークな名前の係ができた。

「それでは次に、仕事の内容を決めよう。」

いよいよ仕事の具体化が始まった。

(一体、どんな活動をしてくれるだろうか。)

不安も心中を横切るが、この際は子供たちの声にしつかり耳を傾けることにした。

「今度ゆうびんちゃん係で、忘れ物調べをするね。」

「朝の会で、ハンカチ、ティッシュペーパー調べをするよ。(女子病院係)」

「勉強係だけ、問題を作ってみたいと思います。」

「青井君係だけ、本を借りるときは貸出カードに記入して下さい。」

次から次へと出てくる新しいアイデア……子供たちのやる気と発想の豊かさには、ただ驚くばかりである。これなら、きつと本腰の入った係活動が展開されることだろう。短い三学期ではあるが、これからの子供達の活動に大いに期待したい。

楽しく
いろいろ

賞(二)

係きめ
学級代表
鈴木龍平
大島直子
れんらく 長江上野松
おたのしみ 鈴木龍平
美化 ぼたのり
ほけん 市村長江上
けいじ 市村長江上
あおい号 市村長江上
体芸育 市村長江上
せとん 市村長江上
黒板 市村長江上
はいたつ 市村長江上
てんき 市村長江上
学干し 市村長江上
しんぶん 市村長江上
さうご 市村長江上

4年 永井 美幸

十一、初めての学芸会に大喜び

～一年生担任 河合 友子～

一月二十四日(火)

学芸会の役を決めて一週間。発熱による欠席者が激増。昨日は八人。今日は十人。教室へ行くと、すぐに、「先生、OO君ね、お休み。」
「OOちゃんもだよ。」

と、子どもたちが教えてくれた。教卓の上の連絡バック、空席が目に入る。何となく気の重い一日の始まりだ。学芸会の練習も算数や国語の授業もできない状態なのだ。

今日、無理をして登校した子もあり、熱っぽい子、咳こむ子が心配で、早く帰宅させることにした。皆、一日も早く元気になることを願う。

しかし、同じことを何度も繰り返して、やっと覚え、身につける一年生。学芸会までに間に合うかどうか、私としては、かなり焦っているのが本音である。

一月二十五日(水)

欠席者六人。昨日よりは、かなり減ったが、油断は禁物。

今日も、他の一年生の先生たちと大・小道具作りをした。不器用な者の集まりなのか、またしても、夜の十時までかかり、松原先生に笑われてしまった。

疲れてくると、途中で(本番までに間に合えばいいから、もうこの辺で止めて、またにしようかな)と思うこともあったけれど、本番と



1年 小幡 朋史

同じセット、同じ物で練習しないで本番に臨むと、できないのが一年生。やはり、急いですべての物を作り上げないといけない。つくづく一年生の担任って大変なんだ、と実感。

二月五日(日)

ブー。ブザーの音。会場が暗くなるとともに、アナウンスが入る。

「第十回、すきくわちょう……」

舞台の上で、いつもより顔を赤らめた子どもたちが幕の開くのをじっと待っている。(さあ、いよいよ本番だ。)私の方が、ドキドキしてしまふ。

「むかしむかし、あったげな。」

鎌倉さんが大きな声をはり上げて、劇が始まった。上手の幕の間から(あの子、大丈夫かしら。間違えないかしら。一つセリフを抜かさないかしら。早口で言わないかしら。)等々、心配でたまらなく覗いていた私とは裏腹に、子どもたちの元気なことーいつもより大きな声を出してがんばっているではないか。堂々と演じているではないか。あの、ほんの十分程の劇に、ちびっ子たちは全パワーを注いでいるのだ。

劇が終わると、

「ね、先生。今までで一番上手にやったでしょ。」「失敗せんかったよ。」「上手だった？」

と、さわやかな顔をして聞いてきた。

「うん。すごくよかった。びっくりしたよ。」

と、誉めると、どの子も皆、満足そうにうなづいた。今まで、たかさんの不安、苦勞、そして疲勞が常にあったけれど、この子たちの満足そうな笑顔を見たら、そういうものが一気に吹っ飛んでしまった。

十二、出会い、そして、別れ

～ 十八年生土担任 金子 喜子 ～

「卒業なんて、まだまだだと思っていたのに、あと二十八日。さみしいな。このメンバーで勉強や運動をしていたい。マラソン大会、学芸会など行事のたびに思い出ができた学級だからこのままでいたい。卒業の歌を歌っていたら、涙が出てきた。卒業なんてなければいいのに」これは「今の心の中」と題して書いたU子の作文の一節である。

卒業一級友との別れ。その淋しさをいち早く感じ、彼女が記したのは学芸会の終わった二月の初めだった。

「男女に関係なく勉強や遊びをしてきた。勉強で分らないと言っては教え合い、みんなで考え出した『新車』や冷凍人間遊び。けんかもしたが楽しかった。中学校では緑丘小学校からの新しい友だちもできるだろうが、私たちの男女仲良しが分かってもらえるとは限らない。このまま、ずっと上地小学校のこの学級でいられたらいいのにな。」

学級内の友だち関係をなつかしみ、中学校での不安をこのように語るE子。

また、

「たかさんの友だちができたこの学級。時間よ止まってーと叫びたい。」とH子。

「学級の仲間とは別れなければならない。残った日々を今まで以上仲良く過ごしていきたい。」とA男とS子。

しかし、

「このまま別れたくない思いと中学校へ行くうれしさで複雑な気持ちだ。」とT男。

どの子にもT男のように、中学生となる新しい生活に喜びはあるはずだ。ただ、学級の仲間と結ばれた心が、卒業を前にした今、よりなつかしく思えるのであろう。

二年前、初夏の光りがあふれるサンクガーデンで全員が額に汗して演じた学級紹介。その寸劇や学級歌を練習し発表することによって新しい学級としてのまとまりもできてきた。そして、友だちの輪も広がってきた。もろくて、いびつな輪であったけれども……。

輪はいく度もちぎれたが、彼らの持つ明るさと素直さによってすぐ元にもどされていった。そして、新しい友が加わると、大きさと一緒に強さも増そうとしてきた。ちぎれそうになると、互いに声をかけ合った。そして、固さも加わった。輪を作る手は、初めのうちは同性でつないでいたのに、いつの間にか異性間にも広がりをもせていった。

この輪の中に、喜怒哀楽の二年間のどんな小さな思い出も大切につめてきた。こうした歩みが、卒業前の感傷と混ざり合って「このままでいたい」気持ちになっていったのであろう。こうした美しい心も、中学校での新しい生活が始まると共に「小学校時代の一つの思い出」として胸の中にしまわれていくのだろう。そして、四月、新しい友や師と出会い、小学校とは違った思い出づくりを始めてほしい。友だち同志で競い合わなければならない時に、つい、自分に負けそうになる時に、小学校で男女仲良くして培った、友を思いやる心と助け合った心を出してほしい。

日直の四人は、作文に朱書きを入れる私を気遣い、日頃の騒がしさを少しも見せない。無口で手早く教室内の掃除をし、黒板に「卒業まであと〇〇日」を書き直すと、控えめに帰りの挨拶をした。その心がうれしくて声をかけた。今日一日の様子を楽しそうに聞かせてくれるが、話題は自然と自分たちの班のものになっていく。二十分程しゃべると、「さよなら四重奏」を残して帰って行った。小さな思い出づくりの手伝いをしてやれただろうか。先程から、また、雨が降り出した。春の雨は暖かい。雨の日の数を重ね、子どもたちが学校を去る頃には、もっと暖かくなっているだろう。何だか、黒板の「卒業まで〇〇日」がほやけてきた。



6年 平沢多映子

四、学校ニユース

新しい担任と共に899人が船出

～1年生171人を迎えて～

一、新しい担任と共に八九九人が船出

開校六年目の春です。

年ごとに激増を続けてきた児童数ですが、いよいよ、あと一人で九百名に達してしまします。

四月四日の入学式には、新一年生百七十一名の他にも二十四名の転入生を迎えました。

土岐教頭・本田校務主任・佐宗先生・夏目先生の転退職の後任としては、柴田教頭・佐野校務主任・岡本・名倉・鶴田・稲垣先生の六人が転入しました。

教職員三十三名を加えると、九百二十二名の「上地丸」が船出しました。

校訓「力いっぱい」の学校づくりを旨とし職員・児童・地域が一丸となって帆を上げました。

嶋田 稔校長の舵取りで、「腹でとべ、足でとべ、頭でとべ」(とべ上地っ子像作者鈴木政夫先生)の「上地っ子」像を求めていきます。

プレハブ三教室を含め、今日も上地小学校校舎から子どもたちの元気いっばいの声が聞こえてきます。

二十四学級	六年一組 二組	五年一組 二組	四年一組 二組	三年一組 二組	二年一組 二組	一年一組 二組	学年組
四六五	二二二 四三三	二二二 一〇〇	一一一 八八九	一一一 九〇〇	一一一 七七七	一一一 九〇〇	男子
四三四	一一一 〇二〇	一一一 四四四	一一一 九〇九	一一一 八七八	一一一 六六六	一一一 五五五	女子
八九九	四四四 五五五	四四四 五五五	三三八 三三八	三三七 三三七	三三三 三三三	三三三 三三三	合計
三十三	青土金 山子屋 静喜恵 夫子子	太名渡 田倉辺 恭嘉修 子章修	松鶴青大 野田木澤 加田秀純 代子幸峰	可稲田守 知垣中 喜喜久 久かみ 子也	小酒松今 林井本枝 加博弘 子子子 明子子	岡河高川 本合平尻 きみ友晶由 みみ子美 子子子子	担任名

二、チャボ一家にヒナが誕生

（ふれあい牧場に集まる上地っ子）

チャボのヒナが可愛らしいうぶ声を上げてから、もう二十日ほど過ぎました。月曜日の全校朝会でも「上地小学校にうれしい春がきました。チャボのヒナが二十匹以上も生まれました。これからも、また次々と卵がかえることでしょう。みんなで可愛がって育てましょう。」と、校長先生が話されました。

こんなわけで、進んで世話を買って出た上地小学校「飼育係」の子たちは休日返上の大忙しです。

四月二十一日のお昼放課。上地小「ふれあい牧場」を訪ねてみました。

「先生、このお母さんチャボの頭、すごいはげておるだらあ。」

「ほんとうだねえ。はげとることは知っていたけど、こんなにひどいとはねえ。」

「これはねえ、『結婚』を申し込まれたもん、なっただよ。」

四年生の高橋佳子さんと中村梨江子さんが、両手の中にメスチャボを抱いて説明してくれました。

すると、今度は「ふれあい牧場」誕生以来の飼育係、五年生の前田君が、ゆっくりと追加の「解説」を始めました。

チャボは人間と違って手が無いもんね。人間で言うと、手が羽根だよ。人間の『結婚』申込みのやり方とは違うもんね。いじめとるじゃあないだよ。

小屋の中で、同じ五年生の鈴木君と一緒に、ヒナたちへの「配膳・給仕中」の前田君に促されて、そっと、のぞいてみました。じっと、卵を抱きながら、母チャボは、二人の子がお皿に入れて差し出した配合えさを盛んについついています。そばにいるヒナも、母親と一緒に可愛い口ばしをお皿に当て、トントンと小さな音をたてています。

「お母さんにえさをやらんと、親子とも死んじゃうもん。」

「このお母さんは、一人で二十個も卵をあっためとるだもん、大変だよ。」

「ね、先生。ちゃんと、母チャボは、食べ方を教えているでしょう。」

「卵をあっためながらもん。水を飲む時だけ下において来るだよ。」

鋭く、そして、細やかな「観察」に驚いていると、放置されたままになっていた卵をさっと割って下に置きました。元気いっぱいヒナが、母チャボと一緒に、卵の黄身、最後の一滴までもきれいなめ尽くしてしまいました。

「あつためない卵は、ほかっておくと、腐ってしまうもんね。」

「もつたないじゃん。きつと、この卵は、どっかが悪いだよ。」

「牧場っ子」の手際よいチャボ「飼育」を見て、「ふれあい牧場」の生と死をめぐるドラマに心をうたれました。そして、ヒナ誕生の一瞬を興奮に身体をふるわせて綴った、鈴木君の日記を思い出しました。

生まれていた。いっしゅん、ときんとした。みんながのぞいていたが、すぐにやめさせた。ほくは、係の子たちに、生んだメスチャボにパンを与えるように頼んだ。こうふんのうずが大きくなっていった。

初代の野田校長先生が持ち込んだチャボ一家の三度目の春。上地っ子の優しい心に支えられ、「五十匹以上」の大家族となって、上地小学校「ふれあい牧場」の記録を更新中です。



5年 川尻 鉄平



校長室に展示中の「上地学校」鬼瓦

三、百年前の上地学校鬼瓦

（佐藤四郎さんから寄贈）

「今から百年前ほど前に、『上地学校』という小学校がありました。旧二四八号線から東海道本線寄りに西に入った場所です。貴船神社があり、字名は下屋敷と呼ばれています。この神社の東隣り、現在は倉庫の建っている所です。明治十三年三月二十八日に創立され……」

これは、昨年度PTA新聞十二月号の「ふるさと上地ある記」の一節です。去る五月十四日（土）上地地区総代会長の佐藤益荒さんが、上地学校に使われていた鬼瓦を二つ、届けて下さいました。開校六年目を迎えた本校への記念すべき貴重な鬼瓦は早速、校門掲示ケースと校長室に展示させて頂きました。

上地学校は、一八八〇年三月から一八八七年四月までの七年間だけ、上地町下屋敷八十一番地にありました。上地学校が解体され、福岡学校に合併された折に、その瓦を譲り受け、今日まで大事に自宅の屋根瓦として使って来られた方がいます。上地町宝六の二番地にお住いの佐藤四郎さんです。この度、ご自宅の新築に当たり、初代上地学校の鬼瓦をご寄贈下さいました。厚くお礼申し上げます。 学校長 嶋田 稔

（「百年前の上地学校」と題して展示中の解説文より）

四、バレー部ついに全国の舞台へ出場

―八月十二日から四日間、東京で大大会―

七月三日（日）午前九時三十分から、第八回全日本バレーボール小学生大会が名古屋短大の体育館で行なわれました。西三地区の予選で優勝を決めていた上地小学校バレーチームは、「今年こそ優勝を」の期待を担い必勝の構えで試合に臨みました。

「攻撃型のチーム。地区予選はすべてストレート勝ち。過去三年間連続して県大会決勝戦で涙をのんだだけに全国大会へが悲願。」と、この日の読売新聞は本校チームの戦いを予想していました。

さて、三つの試合を振り返ってみましょう。
第一戦は十一時五十分、名古屋の鳴子小学校との間で行なわれました。やや、緊張気味の上地小学校チームを見て、「かちかちに見える」と、心配の声が出たのも束の間。みるみる、日頃の實力を發揮し始め十五対〇、十五対一と相手を全く寄せつけず圧勝しました。

続く第二戦。やはり、名古屋地区予選を勝ち進んできた成章小学校です。午後二時きっかり、試合開始を告げるホイッスルが館内に響きました。第一セットは二対二の競り合いからスタートしましたが、上地は次第に点差を広げ十五対二と下し二セットも六点を許しただけでした。高妻・小林・平野・伊藤・上原・奥村の六人が見せる絶妙のチームプレーを前にして、観戦中の校長先生の



バレー部全国大会（小林 繁夫氏撮影）

満足顔です。

「この調子なら負けるはずがない」

一昨年度まで、本校で校務員をしておられた森さんがにっこり笑います。いよいよ、「全国大会への出場切符」をかけた決戦の時が迫ります。

「絶対に勝とうね。西三河大会の時より差をつけてがんばろうね。」

準決勝で名古屋の前山小学校を二対一の接戦で打破り、波に乗り始めた大樹寺小学校を横目に、上地つ子が胸を張って言います。こうして、同じ岡崎の二チームの間で優勝を争うことになりました。男子の決勝戦が一足早く終了していたこともあって、上地小学校対大樹寺小学校の一戦に、三百人を越す観衆の目が集まります。

割れるような拍手が会場から起こるや、戦いが開始されました。準決勝戦で見たねばり強さを發揮して、大樹寺小が死力をつくして戦いを挑んできました。強烈なサーブを連発し、あるいはまた、上地小の目のさめるようなアタックを拾いまくります。第一セットは三対〇から七対三、そして、十二対七と食い下がってきました。しかし、肉薄もこれまで。十五対七、十五対五と大きくリードして、午後四時三十二分、ついに、ゲームセット。本校が、開校以来六年間の念願としてきた「全国大会への出場切符」を手中に納めた瞬間でした。

「両チームとも小柄ながら、きびきびした動きでコートを跳びはねる好チーム同士。試合開始から、安定したレシーブを見せ合い、長いラリーの応酬となった。しかし、一セットの中盤から、地力で上回る上地小が、力強いスパイクを繰り出す必勝パターンを決め始め、徐々にリードを広げた。準決勝を接戦の末勝ち進み、波に乗る大樹寺小も鋭いアタックを放ち、健闘したが、攻撃にもう一つの安定を欠き、力尽きた。」（読売新聞七月四日号）

「全国の人」となった大澤監督・荒木コーチ・選手たちは、新聞記者のインタビューに答え、「敗けるとは思わなかった。次は全国を目指してがんばります。」選手を代表して、キャプテン小林さんが流れる汗をぬぐいながら元気いっぱい語っています。「子どもたちは本当によくやってくれました。存分に力を發揮して、東京でも上位入賞を狙います。」と、大澤・荒木の名コンビ監督・コーチでした。

五、上地つ子「力いっぱい」の大奮戦を展開

（小学校校夏の球技・水泳大会終わる）

夏の岡崎市小学校球技大会は、七月二十一日から三日間の日程で開催されました。サッカー部は三連覇、バレー部は二連覇、そして、バスケ部は初優勝、ソフト部は上位進出の目標を掲げて「力いっぱい」の熱戦を展開しました。各部の戦いを振り返ってみましょう。

バレー部は二連覇を達成

第一日は梅園小学校会場で二試合を行ない、梅園小・竜美丘小を二対〇と一方的に下しました。「上地小学校のバレーが見たくてやってきた」他校の保護者も目立ちました。

第二日も梅園小学校会場で、城南小との一戦だけでした。「にこにこ、いい雰囲気の試合ぶり」と応援のご父兄の言葉通り、二対〇で破り準々決勝進出を決めました。

第三日目の最終日。本宿小・六美南小を二対〇で次々と下し「予想通り」の決勝戦進出を決めました。決勝戦では、大樹寺小と当たりましたが、「力の差を歴然と見つけた」試合展開で優勝しました。まさに「上地は向かうところ敵なし」の勢いで、他校を圧倒し二連覇を果たしました。

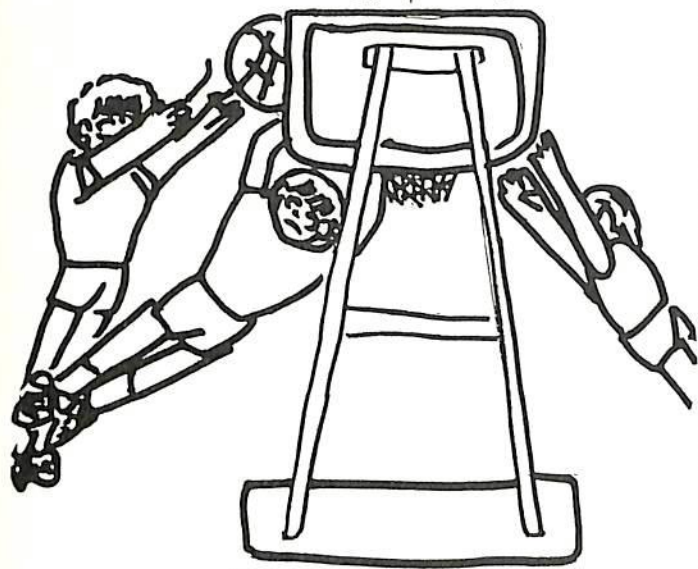
バスケット部は接戦の末、準優勝

第一日は地元の上地小学校会場。羽根小学校との対戦でしたが、前半は調子に乗り切れず、苦戦を強いられましたが次第に地力を発揮し、六十二対二十八のダブルスコアで圧勝しました。

第二日は会場を小豆坂小学校に移し矢作東小学校と対戦し、準レギュラーの子たちも参戦し「余裕」の試合を進め六十三対三で圧勝。選手層の厚さを見せつけました。続く第二試合も一戦ごとに調子を上げてきた六ツ美南小を寄せつけず「上地小学校は得点し過ぎ」の声上がる大量リードの五十七対十五で下し、準決勝進出を決めました。

最終日も前日に続いて小豆坂小学校会場。準決勝では、梅園小学校を三十八対十六で破り、いよいよ、先の西三河大会で敗北を喫した、「宿敵」緑丘小との決勝戦に臨みました。

試合は一点を奪い合う大接戦となり、十四対十三とリード。しかし、緑丘小も歴戦のキャリアを発揮、すかさず二十一対十六と逆転。これに対し、上地も直ちに反撃し、二十八対二十六と再びリードを奪い返しました。こうして、両チームともに、それぞれの限界に挑み「死闘」を展開しました。秒刻みで迫る終盤、追いつ追われつと思つまる接戦の末、三十八対四十一の三点差で惜敗。準優勝でした。



5年 川尻 鉄平

サッカー部は二位入賞

第一日目。会場はホームグラウンドの上地小学校です。第一試合は広幡小を四対〇、第二試合は大樹寺小を二対一で破り、「さすが昨年までの優勝校」との声しきりでした。

第二日目も同じ上地小学校会場。第一試合は対羽根小学校との一戦です。前半は、ついに一点も取れず、〇対〇のまま推移し、やっと後半終了三分前に決勝の一点を入れ、苦しい勝利を手中に納めました。これで、最終日の準決勝戦への進出を決めました。続く第二試合は六美中部小との対戦となりましたが、終始押し気味に試合を展開していきましたが、得点に結びつきません。後半に入って、不運にも、相手の「巧妙」な一点を許し、そのまま時間切れの苦杯を喫してしまいました。

第三日目。いよいよ、「事実上の決勝戦」と言われた細川小との準決勝戦です。優勝候補と目されていた常磐小を一点差で打破り、自信の波に乗る細川小学校です。雌雄を決する試合にふさわしい興奮がグラウンドいっぱいに広がります。後半に一点を先取した細川小がリードを守り抜き、本校の三連覇ならず、三位に終わりました。

ソフト部、肉薄及ばず初戦で破れる

第一日目の試合会場は岡崎小学校のグラウンドです。「今年はいける」の声をバックに第一試合細川小との一戦に臨みました。炎天下でのゲームは三点を追う展開となりました。じりじりと挽回し、最終回にはノーアウトフルベースと肉薄しましたが、ついに及ばず、三対二で涙を飲みました。しかし、選手全員が最後の瞬間まで「力いっぱい」の健闘を続け、爽やかな試合態度が印象的でした。「この夏最高の汗に」（青山先生）になりました。来年度へ向けての着実な足固めが築かれた一戦でした。

水泳大会では、自由形で八位一人賞

球技大会に次いで、雨で二回にわたって延期された水泳大会が八月三日に三島小学校で行なわれました。朝七時過ぎ、乗用車七台に分乗して、四十人を越える選手団が、会場に向かいました。鶴田先生を中心とした先生たちの連日わたる炎天下での指導を受け、真っ黒に日焼けした子どもたちです。

「何とか、一人でも入賞したい。」
「もうちょっとのとこだと思うけど。」

明るい声を残して出発しました。応援の熱気でムンムンするプールサイドには、終日子どもたちの元気いっばいの声が広がりました。

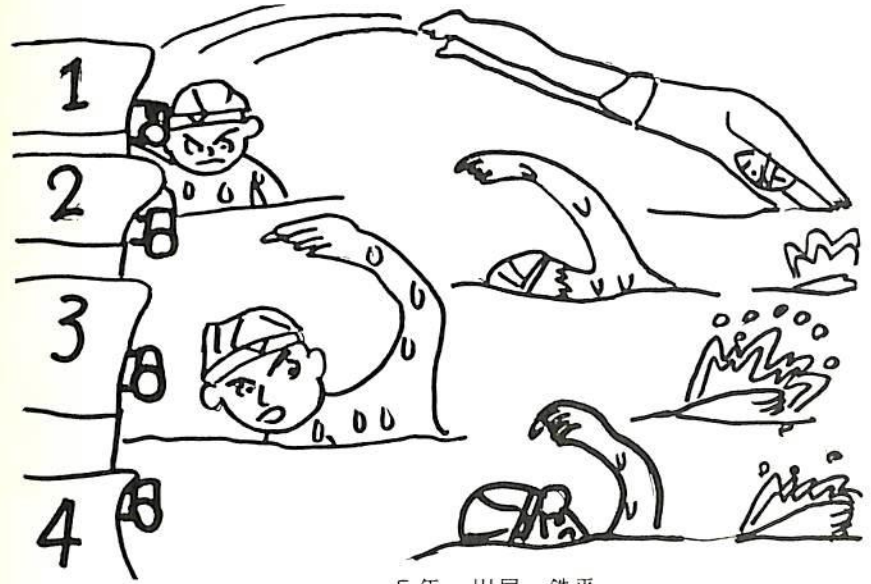
期待を担って、自己ベストの記録を目標に健闘した選手たちの模様を記します。

五十メートル自由形 五年 佐藤一馬君 六位(三十五秒三十五)

日頃の實力を存分に発揮した堂々たる入賞です。来年度への期待が高まっています。

五十メートル平泳ぎ 六年 下川里子さん(四十九秒二) 四十八秒九の六位にわずかに及ばず、入賞を逃し七位でした。

五十メートルバタフライ 六年 小森登志江さん(四十三秒七) 四十二秒三の六位にわずかに及ばず、入賞を逃し七位でした。



5年 川尻 鉄平

六、「来年度予算化に明るい見通し」

〈校舍増築を陳情〉

開校六年目の秋、新たに十一名の転入生を迎えました。九百名の大台を突破し、全校で九百八名の児童数に達しました。今も学区内での住宅建設が急ピッチに進行していることから、今後も児童の増加が見込まれています。こうした状況をふまえ、去る八月三十日、渡辺議員の紹介を得て、学区総代会・社教委員会・PTAなどの代表で市当局への校舍増築の陳情を行いました。次に「岡崎市立上地小学校校舎増築に関する陳情」書の一部を紹介します。

本校は、昭和五十八年に立派な施設設備で開校いたしました。年々児童数が増加して、教室の不足を来たすようになって参りました。そのため昭和六十二年度に音楽室を普通教室に転用、六十三年度にプレハブ教室を三教室設置していただきましたが六十四年度は、なお不足するであります。また、当初より図工室・家庭科室もなく、教育活動に支障を来たして居る現状であります。どうか、右のような実情を御察察いただきまして格別の御高配を賜りますようお願い申し上げます。

昭和六十三年八月三十日

- 上地学区総代会
- 社 教 委 員 会
- 共 生 会
- 父 母 教 師 会
- 友 愛 ク ラ ブ
- 体 育 指 導 委 員 会
- 子 供 会



市当局に校舎増築を陳情する学区諸団体代表のみなさん

七、「創意」と「熱演」の秋季大運動会

「今日の六時間目に運動会のアナウンスの練習をしました。これでアナウンサーの仕事は三回目ですが、今年が最後です。ラストの運動会なので、間違えずにゆっくりと落ちて話したいと思います。学級対抗リレーでは、二組や三組に負けないようにがんばりたい。」

「受け持ちの青山先生は『ゴールがあるから一生懸命できる』と言った。運動会だって『運動会本番』というゴールがあるからがんばらなければ。」

予行演習が終わった日、六年生の田中はなさんと中田千鶴さんが運動会当日に向けて並々ならぬ「決意」を日記に書いていました。こうして、いよいよ、開校六年目の秋季大運動会当日を迎えることになりました。

「北の風曇り、時々晴れ」（名古屋気象台午前六時発表）と、暑くなく寒くもない絶好の運動会日和りに恵まれて十月二日（日）の日の出を迎えました。

「わあ、もういっぱいゴザが敷かれている。すごい熱気が伝わってきますね。」

午前六時十分、早朝から出勤してきた体育主任の渡辺先生が思わず叫びました。夜明けを待って、トラック周辺の見やすい場所で声援をおくろうと、ご父兄が一般席に敷物を広げて行かれました。上地っ子も姿を現わし始めます。

「運動場のどこで花火を上げるの？上がるところが見たいもん、お父さんと早く学校に来ちゃった。」

と、三年生と一年生の新川姉弟です。

こうして、早朝から駆けつけた上地っ子の期待に応えて、花火講習の合格を済ませた上地小「花火師」三津井先生が手にしたライターが音をたてました。その瞬間、「ズドン」腹の底まで響く轟音が伝わってきました。時ならぬ、夜明けの爆音に驚いたコサギが一羽、東の空に飛び去って行きました。

「皆さんの中から、将来のオリンピック選手が生まれることを期待しています。」

「晴天に恵まれ、私たちは校訓『力いっぱい』に恥じない演技をします。」

嶋田校長先生と児童代表の六年生小倉有子さんの挨拶で、午前八時四十五分開会しました。全校種目大玉送りに続き、低学年の徒競走が始まりました。

時代の人気機種、超小型化してきた八ミリビデオや望遠ズーム装置付きカメラの放列がゴール近くにできあがりました。ざっと、三十人のお父さんとお母さんたちです。

六年生の学級対抗リレーで横山君が両手を広げ、喜色満面のゴールイン。

「小学生とは思えない立派な体格ですね。」

岡崎医療刑務所の房宗所長さんも、真剣な上地っ子を賞賛しながら、驚きを語ります。本部テントでは、来賓の方々による上地小学校の運動会談議も花盛りです。

「いつもながらの気迫を感じますね。」（渡辺市議会議員さん）

「一年生の素晴らしい成長に驚きます。」（成瀬総代会長さん）

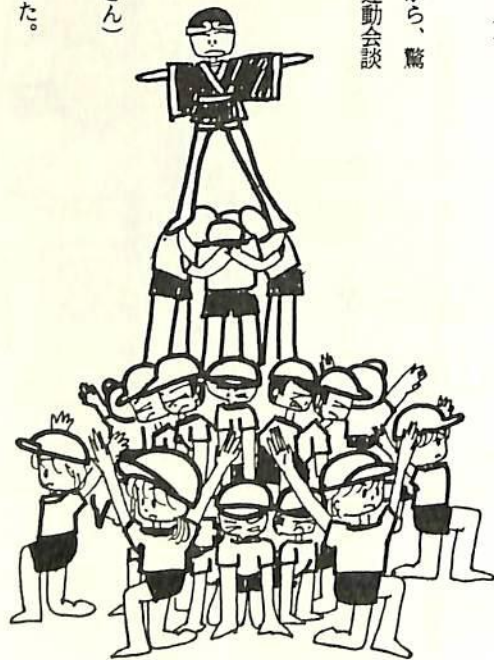
「年毎に力をつけてますね。」（市村PTA会長さん）

「先生たちの創意が伝わってきます。」（鈴木元教育長さん）

「素晴らしい組み立て体操に感激しています。」（稲垣指導主事さん）

「上地小の伝統が立派に生きてますね。」（野田前校長先生）

午後二時四十五分、熱気に包まれ、盛会のうちに無事終わりました。



6年 大羽 里美

八、「雑草コーナー」が誕生

「学校だより」七、八月号に本校青木先生の「上地雑草探訪」が掲載され、子どもたちの雑草への関心が高まっています。「青木先生って、素晴らしい研究をされていますね。子どもたちもとってもよい刺激を受けています。親としても、こんなうれしいことはありません。」

と、四年生のお母さん。

こうした声が聞かれるようになった九月。

「本校には、六年生の壁谷君という『雑草博士』もいる。折角の豊富な知識を何とか全校の子どもたちの財産にしてやりたい。」
嶋田校長先生の発想でした。

早速、北校舎二階に「この雑草は？」コーナーが設置されました。児童用机の上に、わらばん紙半分の大きさの用紙に解説と雑草用のコップが用意されました。

「毎週月曜日には壁谷君が雑草を取り替え、解説も書いてくれることになりました。みな、上地学区のものを頼んであるので、これからどんな雑草が登場するか楽しみにしています。」
と、にっこり笑う校長先生です。

雑草コーナー第一号を見てみましょう。

エノコログサ (狗尾草) イネ科 別名(学名) はネコジャラシ

名前の意味 エノコログサとは子犬のしっぽのことで、ネコジャラシはネコをじゃらせるという意味。

花の咲く時期 八〜十一月

生えているところ 上地では、ありとあらゆるところ。

上地小学校のみんなで呼ばれている名前 「たぬきのしっぽ」という人が多い。

よく似た草 このあたりでは、キンエノコロ・ギンエノコロが多い。

「南門から出たすぐの道端で摘んできました。」

壁谷君が、背筋をびんと伸ばして話してくれました。

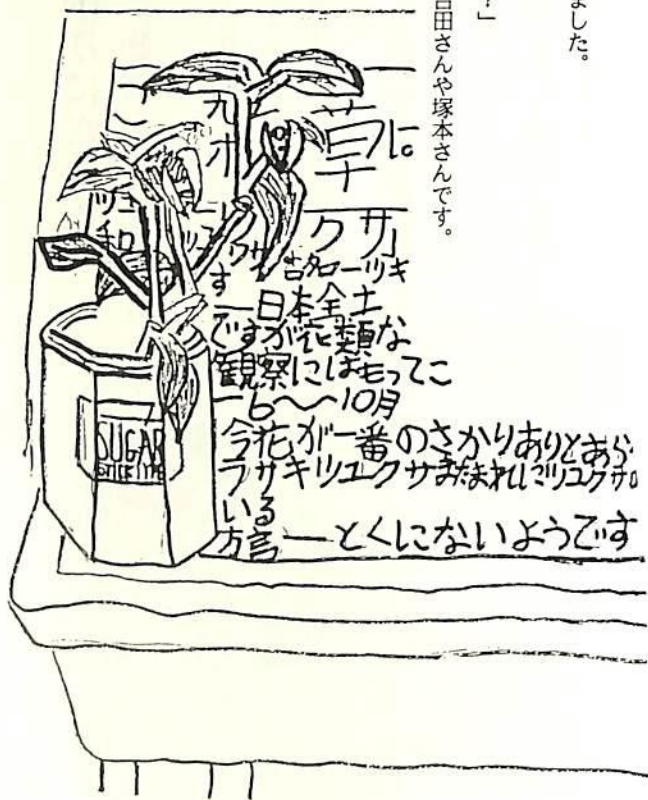
「今まで、全然知らなかった草だよ。」

「見たことあるけど、エノコログサっていうの？」

いち早く、コーナーの見学を済ませた三年生の吉田さんや塚本さんです。

「今度は、動物コーナーがほしいね。」

と、上地っ子の夢が広がります。



4年 鈴木 侑平

九、「上地よもぎもち」作りに六十人

（P.T.A.のグループ活動でふるさとの味を楽しむ）

「ふるさと上地の味・おふくろの手作りの味・親子で作れば親子ふれあいの味という趣旨に六十人を越すお母さんたちの参加を頂き、本当に喜んでいきます。今日は実習を通して、『上地よもぎもち』の作り方を覚えていかれ、ご家庭でぜひおふくろの味を楽しんで下さい。」
P.T.A.手芸グループの呼びかけで開かれた「上地よもぎもちを作る会」に集まったお母さんたちを前に嶋田校長先生が話しています。十月二十日（木）午前十時の上地小学校第一理科室です。

この日に向けて、学区料理研究家の丸林恭子さんを初め七人の文化部のお母さんたちが、ふるさと上地のよもぎを摘んだり、あんこを煮たりの準備万端を引き受けて下さいました。

「ああ、おもしろそう。お母さん、家でも絶対作ってね。」

理科室から流れ出るいい香りに誘われて、放課になると、上地っ子が集まり始め可愛い声援も送られます。

「おもしろいですね。よもぎが、この上地にも生えているんですか。思いつきがいいですね。家庭料理に関心が高いですね。」

「お母さんたちの表情がいいですね。きっと、家で子どもたちに喜ばれるでしょうね。また、味もいいです。」

取材に訪れた神谷・亀山両新聞記者も出来上がったばかりの「よもぎもち」を試食しながら感想を語ってくれました。

「お一人十個のおみやげつきです。」

「わあ、うれしい。うれしいわ。一緒にお願いわね。」

舌づつみをうちながら、帰宅後の「プラン」に話が発展していきます。昭和六十三年十月二十日、こうして、正式に「上地よもぎもち」が誕生しました。この日を契機に、学区に大きな広がりを見せていくことでしょう。（参考までに作り方の紹介をします。）

「上地よもぎもち」の作り方（丸林 恭子さん提供資料より）

材料・・・上八十個分

もち 米 一・五キログラム（二升）

よもぎ 一五〇グラム

重曹 小さじ一ぱい

つぶあん 一・五キログラム

もちとり粉 適量

つぶあん（でき上がり）一・五キログラム

あずき 五〇〇グラム

砂糖 五〇〇グラム

塩 少々

作り方

一、よもぎは葉先の部分だけつま取り、水十カップに塩大さじ一カップ
重曹小カップ一を入れて沸騰後一三分ゆでる。

二、つぶあんは六十個にまるめておく。



理科室でよもぎもち作りを楽しむお母さん

三、もち米は洗って、六時間以上水にひたした後、ざるに移して約三十分水切りする。

四、もちつき機で蒸す。蒸し上ったら、「一」のよもぎを二〜三回に分けて入れながら約十五分つく。

五、もち取り粉を敷いたバットに移し、六十個にちぎる。

六、もちを丸くのばし、中央にあんをのせてつまみ、合わせ目を下ににする。

つぶあんのはやり方

一、あずきは洗って、たっぷりの水に三〜四時間ひたす。

二、ひたひたの水でゆで、沸騰後湯を捨てる。(あく取りのため)

三、常にひたひた程度の水で三十分程煮る。続いて三十分程でやわらかく煮つめる。

四、ほとんど水がなくなったところで、砂糖を入れ、更に煮つめる。木じゃくしでこげないように混ぜながら煮つめ、あずきを半つぶしにする。

五、仕上げに塩を加えて甘味を強める。

大好評、ぜひ次の企画を
〜参加のお母さんの声〜

おいしいよもぎもちでした。家での評価も百点でした。ぜひ家庭でも挑戦したいと思います。

(伊奈 正子さん)

自分で作ったよもぎもちを食べるなんて何年ぶりでしょうか。懐かしく貴重な体験をさせて頂き、有り難うございました。

(富永 道子さん)

隣のグループの方と協力しながら、とてもスムーズにできました。あれだけたくさんで三百円なら我が家でもと話しながら帰宅しました。

(安田 光子さん)

和気あいあいの楽しい雰囲気です。思いがけなく上手にできました。次回は、ぜひパン作りの会をお願い致します。

(西田由紀子さん)

十、小田裕司君、安らかに眠って下さい 〜持病のぜんそく発作で急逝〜



君裕司遊ぶで館育体

十月も最後の日曜日、三十日の午前十一時五十分でした。三年生の小田裕司君が蒲郡市民病院で亡くなりました。

「母親が買いた物に出かけた留守でした。いつものようなぜんそくの発作が起きたので自宅で吸入の応急手当てをし、かかりつけの蒲郡市民病院に連れて行き治療を受けましたが、その甲斐もなく急死しました。」

この日、発作で苦しむ裕司君を自家用車に乗せて病院に急いだお父さんのお話です。

全く予期しなかったことだけに、お母さんも最期に立ち合うこともなく急逝してしまいました。

「土曜日の二十九日は、とっても元気におかさきつ子展の作品『宇宙ステーション』に銀色のスプレーをかけた後、十一月の校内球技大会に勝つための作戦を友だちと相談したりしていたのに、何とも言葉がありません。……………」

三十一日の職員朝会で、担任の守山妙子先生も悲しみの余り絶句される急変でした。

「ほくは、受け持ちの鈴木尚子先生に聞いて、半分泣けてしまった。裕司君といっしょに、トラックの絵をかいいたりして遊んだことが忘れられません。」

サンクガーデンで肩を落して、寂しさを語ってくれた同学年の三石君。

「土曜日の一斉下校では、いつもより元気で、同じ組の中原君と並んで帰りたいと言い出して聞きませんでした。そんな勝手なことはいか

んと注意したら、怒って一人で家の方に走って行ってしまったので追いかけていっしょに手をつないで帰りました。」と、通学班長の岡村健一君。裕司君との最期の一斉下校を「とってもさびしい」と、いつもの明るさも控え目です。校長先生も月曜日の全校朝会で、こみ上げる悲しみを押えながら、開校以来初の上地っ子の死を語りました。

「お父さんに看取られて、突然、裕司君が亡くなりました。まるで、今にも話しかけてきそうな優しい顔で眠っていました。いつものように、手も顔も温かでした。皆さんは、裕司君の分まで力いっぱい生きていって下さい。」

九百人の上地っ子が、声もなく聞き入りました。八才半ばの若い命を失った寂しさを沈む上地小学校の初冬です。以下は、告別式の行なわれた十一月一日、同じ学級の堂園秀樹君が読み上げた「お別れのことば」です。

裕司君、今日も裕司君が「おはよう」と、元気に教室へ入ってくるような気がしました。でも、いつまで待っても、裕司君は来ませんでした。

十月二十九日の土曜日、おかさきっ子展の作品をいっしょうけんめい作っていたのに、みんなで球技大会の作戦を考えていたのに、あんなに元気だった裕司君が亡くなってしまふなんて、思ってもいなかった。

「うそだあ」

ほくのそばに、裕司君がいるような気がするよ。絵をかくことが好きで、ねこやトラックの絵を上手にかいていた裕司君、三組の仲間、裕司君。

ほんとうにもういないの？天国へ行っちゃったの？天国で、ほくたちを見て笑ってしてくれるのかな？ほくたちは、裕司君の分もしっかりやるよ。上地小学校で、力いっぱいがんばるよ。ほくたちのがんばりを見ていてね。とってもつらいけど、さようなら

上地小学校三年一組 代表 堂園 秀樹

十一、川野さん宅全焼に上地っ子の友情集まる

（旧児童・保護者・職員の見舞い相次ぐ）

「ものすごい煙が上がっていた。二四八号線の東側から。」

十一月二十八日（月）の午前九時頃のことでした。職員室に戻ってきた佐野先生が言われました。

「子どもたちの家が火事であればよいが……。」

こんな会話が始まるや、間もなく近所の方から電話連絡が入りました。残念ながら、不吉な予感的中してしまいました。新聞報道を見てみましょう。

岡崎でも「民家全焼

泪風ヒーター過熱?

二十八日午前八時四十分ごろ、愛知県岡崎市上地町小畑、会社員川野庄一さん（三十四）方から出火。木造平家建て住宅約五十平方メートルを全焼した。岡崎署の調べでは、つけっぱなしになっていた石油温風ヒーターの過熱が原因らしい。（中日新聞）

「スイッチは切ってあったはずなのに。気がついた時は、火が天井を走っていました。どうすることもできませんでした。」

発見した時、すでに手がつけられないほどの火勢になっていました。

「誰も火傷を負ったり、隣家に燃え移らなかつたことが不幸中の幸いでした。」と、肩を落とす奥さんです。

いよいよ師走を迎えようとしていた矢先のことです。川野さんは「当分の間、知人の社宅での仮住い」という不便な生活を余儀なくされ

てしまいました。

全焼という事態を知った二年五組・四年四組のご父兄が早速、多額のお見舞い金や衣類などをお届けしたり、職員一同も心ばかりのお見舞いを申し上げました。

児童会担当の渡辺・名倉両先生の指導で、上地小学校児童会も「わたしたちのおこづかいせつやく」募金運動を開始しました。児童代表委員会の子どもたちが手作りの募金箱を持って、十二月三日までの一週間にわたる活動を展開しました。

「ぼくは、おこづかいの全財産を持ってきた。」と、三年生の堂園君。

こうした善意の子どもたちが次々と登場、募金運動の先頭に立った代表委員の子どもも感激の連続でした。

「知ってるよ、四年生の川野智美さん。とっても優しい子だよ。」

「弟の貴洋君は元気のいい子だよ。運動場でもよく見かけるよ。」

「千円札が学級で四枚も五枚もあったよ。」

こうして、川野姉弟への上地っ子からの熱い友情は、とうとう二十七万八千二百二十五円に達しました。このほか、文房具・タオル・ジャージ・洗剤・商品券などの見舞い品もたくさん寄せられました。

十二月五日の午後、校長先生や渡辺・名倉両児童会担当の先生と一緒に、六年生の小倉有子・和田享子両代表委員の二人が川野さん宅を訪れてお見舞いをお渡ししました。

「こんなに頂いて頂いてお礼の言葉がありません。皆様の温かいご激励で何とか落ち着きを取り戻しています。ありがとうございました。」

悲しみに耐え、上地っ子の友情に感謝しつつ、今後の固い決意を語る川野さんです。川野さん一家は、上地町味噌ケ入十番地、大谷池近くの新住所で歳末の不便な暮しを始められました。

「ぼくたち、今度の家で仲良く暮しているよ。」

五日(月)の下校前、児童玄関で靴をはきながら、二年生の貴洋君が赤いほっぺで元気に語りました。

十二、「チェリー二世」誕生で迎えた平成元年

〜野鳥コーナーに喜びの声〜

昨年の十二月八日、一個目の卵を発見して飛び上がって喜んだのは五年生の吉田・宿谷・本間・横井・南さんたちでした。この五人は、手紙を添えて校門前に置かれていたヤマブキボタンインコ夫婦の世話を進んで引き受けた飼育係の面々です。

卵は、以後も増え続けて十二月十五日には五個になっていました。

「にわとりやチャボは二十一日で卵からかえるので、順調にいけば

正月明けにはヒナの声が聞けるよ。」

「チェリーとミントは仲がいいのできつとヒナがかえるはずだよ。」

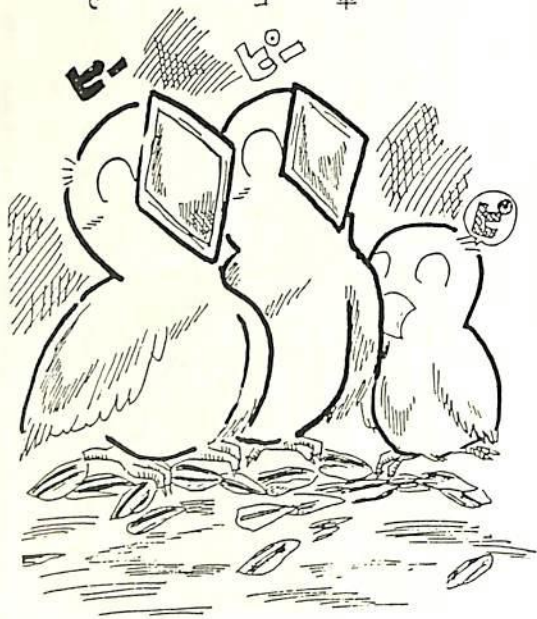
こうして、二学期末のサンクガーデンでの会話がはずみ、話題は早くも「チェリー二世」誕生の時期に移っていました。

そして、冬休みに入ってから日直職員の「勤務」の一つにインコの世話が加えられたりしてきました。

「もう、そろそろのはずがどうだろう。」

「一度、そうっと巣箱のふたを開けてみますか。」

居合わせた職員の話がまとまったのは、年が改まった一月の六日でした。鳥籠の中に手を入れ、巣箱のふたを開けてみました。じっと、



5年 横井英里子

卵を抱き続けていたチェリーの羽の下にかすかに動くものがあります。急に、巣箱のふたが開けられたためか、びっくりしチェリーが箱から飛び出しました。

巣箱の底には、えさにしていたヒマワリのからが一面に敷き詰められています。その中で元気に動くヒナがいるではありませんか。三四が産毛のはえた赤いからだを寄せ合うようにして動いています。

「やあ、これはすごい。どうにかえったー」

「本当だ。ついに二世誕生ー」

「正確だね、卵の生まれた十五日から数えるとちょうど二十一日目だ。」

早速、五人に連絡です。

「えっ、うれしいー」

叫びにも似た感激の声が受話器に響いてきました。

この日、学校に集まった五人の子たち。

「可愛い、まだ柔らかそうだねえ。」

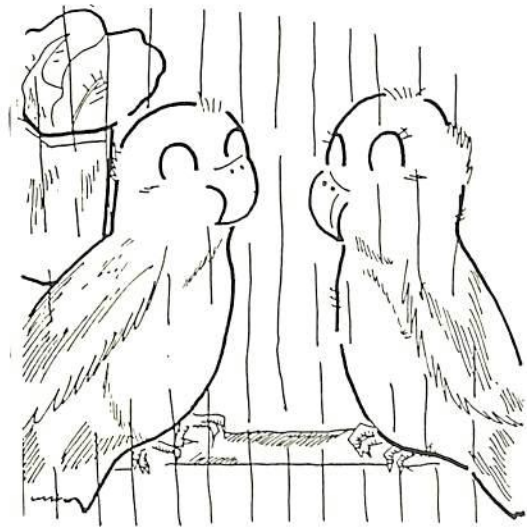
「昨日生まれたのかしら。」

「ねえ、これからどうする？赤ちゃん。」

「手のりになるよね。あとの二個も早くかえるといいね。」

「えさも特別メニューを用意しないとね。たまご入りがいいかしら。」

ふくれあがったチェリー一家との嬉しい対面を果たした飼育係の五人に素晴らしい「初夢」の話題がつきません。天皇陛下崩御で明けた九日の始業式にはヒナが五羽に増えていました。昭和が終わり、「平成」に改元されて迎えた三学期。小雨にけむるサンクガーデンに「二世誕生」を喜ぶ上地っ子の瞳が輝いていました。



5年 横井英里子

十三、おばあさん、荷物提げさせて下さい

（下校途中の二年生の子どもたち）

「先生、この給……」

一月二十四日（火）の午後四時四十分頃でした。三年生の今井君、梶原君、津曲君宮崎君、中名生さん、志賀さんたちが職員室にそろってやってきました。下校途中の嬉しい「事件」の報告をしようと相談がまとまった模様です。その全容を紹介しましょう。

学校帰り、奥山田池のところまで行くと、知らないおばあさんが空缶をビニル袋にいっぱい買い物バッグを持って重そうに歩いていました。一緒にいた戸松さんが、あの荷物を提げて上げようよと言いだしたので、みんな賛成して、おばあさんに言いました。そうしたら、おばあさんは、大丈夫大丈夫、自分で持てるからと言った。それで、あんたたちはいい子だね、今買ってきた餡があるから、これをあげるって差し出してくれました。だけど、荷物も持たないのにもらってはいけないと思って、いらぬからと言ったら、取っておいて、道にほかって行ってしまったので、戸松さんが拾って、みんな大きな声で、ずっと向こうまで歩いて行ってしまったおばあさんに、アリガトウーってお礼を言いました。そうしたら、おばあさんが、手を振ってバイバイと言って歩いて行ってしまいました。それで、この給をどうしよ



6年 笹良亜希子

「うかって、相談したら、学校に持って行こうと決まったので来ました。」

これが、笑顔の六人がつなぎつなぎ、話してくれた「てん末」です。

「本当にみんな、いいことしたね。きつと、おばあさん、嬉しかったと思うよ。この飴、すごくいい飴だね。砂糖無使用と書いてあるので本物のさつまいもだけから作ったのだよ。」

と、飴のビニル袋を読んで聞かせました。

「それじゃあ、その飴、豊橋でできたのでしょうか？おいしい飴だよ。」

清水先生も話に加わり、子どもたちの表情が一段と輝きました。ソロバン学校に行った戸松さんの分は明日まで残して置くことにし、早速、六人が二個ずつの飴を口にしました。

「いいことをしてくれたね。有りがとうね。おばあさんに代わって先生からもお礼を言うね。」

来客と歓談中の校長先生も破顔一笑、心暖まる冬の夕暮れでした。



6年 笹良亜希子

十四、柴田誠教頭先生が急逝

「生かされて生きていく」を貫いた生涯



「昨夜から容体が急変しました。酸素吸入の担当を受け始めました。」

連休が明けた十三日（月）午前七時前、柴田誠教頭先生の奥さんから緊急のご連絡。直ちに、校長先生が市民病院へ直行されました。あまりの、急な事態のため病室にはご長男など子どももまだ到着されず、病室には奥さんだけしかいらっしやいませんでした。

奥さんによれば、十三日の午前二時頃、かすかな声ではありましたが、「世話になった、ありがとう」と言い残されたのが最後のお言葉になってしまいました。

十一日（土）の夜、学校からの帰途、病室を訪ねた時は、肩で呼吸をされ、両手を胸の上で組み、静かに眠ってしまいました。しばらくして、目を覚まされると、聞き取れない程のかすかな声で言われました。

「いつも、皆さんにすみません。お忙しいのに申し訳ありません。」

返す言葉もなく、細くなってしまわれた右腕を握り「先生、食べられるようになれば体力もついできます。きつと、よくなりますよ。」と、お話して病室を出ました。これが、柴田教頭先生との最後になってしまいました。

まだ、比較のお元気だった頃、「腹がはって」と、ベッドで溜息をつかれた先生の心中は、いかばかりだったか、察するに余りありません。

毎朝、六時半過ぎには出勤され、すぐ、玄関に掃除機をかけておられた先生の姿が目には焼き付いて離れません。

「今日は、苦しくなってしまうて、ドミの前の道でしゃがみ込んでしまった。」
と、もろされたのは昨年の秋だったと記憶しています。

四百一人を越える生口別式への参列者

十五日(水)午後二時、風もなく冬とは思えないような暖かさに恵まれ、柴田誠教頭先生の告別式が行なわれました。八幡町の日本キリスト教団岡崎教会には定刻前から続々と参列者がつめかけ、二階式場は瞬く間に万席となり、階段から階下の駐車場まであふれてしまいました。四百人をはるかに越える参列者の表情も亡き教頭先生を偲び、悲しみに沈んでいます。

司式に当たられた竹内牧師が、前奏・讃美歌・主の祈りなど教会儀式を厳肅な語りのうちに進めていかれます。

「十日ほど前、病床の兄弟柴田誠さんを見舞った折、兄弟は言われました。このごろやと、自分は生かされて生きるということの意味が分かったような気がします。と、自分に限りなく厳しく、人生の総括をする年令で神に召された先生でした。兄弟はとこしえに主の宮に住まわれることになりました……。」

お人柄を的確に紹介され、参列した私たちの悲しみを和らげ、柴田教頭先生の行く道を指し示して下さいました。教え子や父母や教職員のですり泣きが讃美歌のメロディーと重なりあって式場に流れていきます。嶋田校長を初め三人の方たちの弔辞が更に大きな共感と悲しみを誘います。

「三十三年間、まさに昼夜を分かたぬ教職への情熱的なお仕事ぶり、円満なそして、大きな包容力は後に続く私たちの鏡でした。不言実行誠心誠意の人生は語って尽くし切れません。(嶋田校長)「共に悩み苦しみ笑い合った仲間として惜しんでも惜しみ切れない友を失いました。徹底した教材研究、子どもたちへの報われることを求めない愛情。彼こそ、真の教育者でした。(鈴木聡一養護学校副校長)「毎朝の交通指導など私たち下地っ子をいつもいつも優しく見守って下さいました。先生のごことは、生涯忘れられません。(平沢多映子児童代表)

三時四十五分、「やすらぎ」の山に、重々しく閉じる扉の金属音を残し、柴田誠教頭先生は天に召されていきました。私たちにやり場のない深い悲しみを残して……。

以下、嶋田校長と児童代表平沢多映子さんのお別れの言葉要旨を紹介しながら、心からご冥福をお祈り致します。

お別れの三言三語

謹んで柴田誠教頭先生のご霊前に捧げます。教頭先生が永眠せられ、私たちはその失うところの大なるを悲しみ、表わすべきことばを知りません。

ご家族さまの手厚い看護のいかにもなく、遠く旅立ってしまったわれた教頭先生。再起を信じていた私たちにとって、先生のご逝去はまさに晴天のへきれきで、悪夢としか思われません。

先生は昭和二十八年、本宿小学校を振り出しに、三十三年間の長きにわたって、教育界に貢献されました。どの学校においても内に秘めた情熱とたくい稀なる人格をもって、その実力を遺憾なく發揮され、全児童教職員の絶大な信頼を受けておられました。

先生は常に不言実行、率先垂範をモットーとされ、その信念を最後まで貫かれました。中学校の剣道部顧問になられた時、剣道の経験がなかった先生は、ひそかに道場に通い、剣道の技を身につけて指導に当たられました。

役職につかれてからは、毎日だれよりも早く出勤され、校舎内外はもちろん、清掃までして児童・職員を迎えられました。夕刻は職員が帰宅後、すべての点検を一日たりとも欠かさず、完璧、確実になし終えられたことは驚異的で、先生の責任感の強さを物語って余りがあります。(中略)

しかし、昨年秋季ごろより健康がすぐれず、疲労も日増しに蓄積してまいりました。私たちが心配すると、先生はきっぱりと、「いや、大丈夫です。」

と言われ、病気の気配は片鱗も見せられず、二学期の終わりまで病を押して勤務されました。私たちは、人に優しく、己に厳しい

先生の態度に深い感銘を受けると同時に、先生の健康の保持をひたすら願っていました。

一月九日、肝機能障害の診断で市民病院に入院され、一時は小康状態を得ましたが、薬石効なく、病状は次第に悪化してまいりました。そして、ご家族・児童・職員・保護者の回復への祈りも空しく、闘病生活わずか一か月余で、二月十三日午前七時四十分ついに帰らぬ人となってしまわれました。

志半ばにして、病魔に倒れられた先生の心中を推察するとき、断腸の思いに駆られるのみであります。教頭先生、先生こそ真の教師、教師の鏡であります。私たちは先生のような立派な方に教えられ、助けられたことを生涯の誇りに思い、感謝の念は尽きることはありません。

先生、この上は残されたご家族をいつまでも天国からお守り下さい。そして、上地小学校の子どもをこれからもお導きくださるようお願い致します。

では安らかにお休みください。さようなら。

上地小学校長 嶋田 稔

おわかれの三言三葉

またいつか、以前と同じように私たちの登校中に、いつもの場所で、

「おはようございます。」

「おはよう。」

とあいさつをかわせることを待っていたのに、このようなことになってしまいました。私たちが安全に登校できるようにと、朝寒いののに、雨の日も風の日も見えてくださったこと、感謝しています。

一斉下校の時に、交通事故、水の事故、火の事故に気をつけなさい、とよくおっしゃいましたね。教頭先生がいつも上地っ子のことを心配して下さったこと、よく分かっています。

修学旅行の時も、送り迎えに来てくださったでしょう。そのお礼で教頭先生にお手紙をお渡ししたら、

「ありがとう。」

と笑顔でおっしゃってくださいしたのは、二か月とちょっと前のことではありませんか。まだ、本当に少し前、とっても元気だった教頭先生なのに……。

おぼえていらっしやるでしょうか。委員会の仕事ですっかりおそくなってしまった日、教頭先生が、まだくつ箱にくつがあるのを聞き、日直の先生とひっしになって残っている子を探してくださいました。あやまりに行った時も、優しく、

「いいよ、もうこれからそういうことしっちゃあいかんよ。」

とおっしゃってくださいました。本当なら、心配かけて、おこってしまうのに。その時、とっても優しい人なんだ、と分かったのです。

そして、もっとよく分かったのは、私が「学校だより」のさし絵をかいていた時のことです。何をかいたらいいのか困っている、と、教頭先生が親切に相談にのってくださいました。次の日、登校中に教頭先生が、

「さし絵、かけた？」

と聞いてくださいました。思ってもみなかった一言だったので、すぐうれしかったんですよ。

私たち上地小学校九百十三人の子は、教頭先生の優しいお顔を決して忘れません。

そして、教頭先生のお教えを必ず守ることをお約束します。教頭先生、安心してお休みください。

さようなら、さようなら。

児童代表 平沢 多映子

五、寄稿

一、上地焼きの会に参加して

（PTA文化部のグループ活動から）

上地 松井 洋子

去る十二月四日（日）の午前九時から、岡崎医療刑務所で「上地焼き」を作る会が行なわれました。この会が開催される一か月前の会員募集には定員をはるかに越える六十名のPTA会員の皆さんから応募がありました。刑務所内の作業室やロクロなどの関係で、最大十五名までということ、やむなく、サンクガーデンで希望会員の子どもたちによる「公開抽選」で決することになりました。こうして、嶋田校長先生を初め文化部長の大平さん、手芸グループ責任者の小島・高野瀬さんら十五名の皆さんが、開校以来初の「上地焼き」の会に挑戦することになりました。

この日は、房宗所長さんを初め、数名の所員の方々のご奉仕と市内大平町在住の陶芸家杉浦豊葉先生ご指導で十二時過ぎまで「成形」作業が真剣でしかも楽しい雰囲気の中で行なわれました。以下、「上地焼き初体験」の感動的な寄稿をご紹介します。

「陶芸」

およそ縁のない二文字に魅せられて不安と期待に胸おどらせて、今回参加させて頂くことができました。それよりも何よりも正直なところ、刑務所内作業ということだけで始まる前から妙に緊張してしまい、外の寒々とした空のように何もしないでこのまま失礼しようかとも思いました。

親切な先生や所員の方々のご指導ご配慮とはうらはらに、案の定、製作開始後の数十分、何をどうして良いのかわけも分からず、ただ粘土をこねたり伸ばしたり。

周りを見れば、手先の器用な人たちがすでにそれなりの形のものに成形していくのがイヤでも目に入ってきます。そんな時、ふと、祖母からよく聞かされたことを思い出しました。

私が幼稚園の時のある参観日のこと、やはり粘土を使った授業で、みんな思い思いに象や犬、ねこ、汽車と、色々なものを次々に作っているのに、粘土に触ろうともせず、ただポツツとしているだけの私を見て、母は何とも言えないはずかしい思いをしたそうです。

そして今、幼稚園はおろか、「更年期」にさしかかろうとしている私、せっかくこの機会を大切にしなければ……。

そう思うと、何か急にやる気が湧いてきました。とにかく、やるだけやってみようと思いました。

それから、およそ一時間後、過去のあの情けない自分とは思えないすばらしい作品が完成したのです。

菓子器なのか花器なのか、わけの分からない作品が……。

そして、先生から、

「いいものができたね。うん、こりやすばらしい」

と、思わぬおほめの言葉。近くにいた人たちも、

「本当にステキだよ」

と、言ってくれました。

たとえ、それがお世辞であれ、私の心はウキウキです。次に、わが夫のチョイと一杯用のぐい飲み、トイレ用の一輪差し、たった三品ではありますが、心は満足感ではちきれんばかりです。ほんの三時間半あまりの中で、幼稚園の頃の自分を脱皮した、すばらしい貴重な体験をさせていただくことができました。

所長さんや杉浦先生を初めPTAなど関係者の皆様方、本当にありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。

二、「学校だより上地」を読んで

（鈴木大地君への手紙にかえて）

若松東 榊原 和子

「上地」十二月号を楽しく読ませて頂きました。修学旅行を初め盛り沢山の内容を全て一気に読み終えると、何ともほのぼのとして優しい気持ちになり、返事が書きたくくなりました。

中でも「供養塚に祭ってもいいですか」は本当に胸を打たれました。読むと、すぐ鈴木君はどんな子か会いたいと思いました。

この夏、ネコではないが大きなヘビを三度も車でひきそうになりました。

「うーん、こんな所に出てきて私でよかったけど、他の人ならひかれるところだよ。」

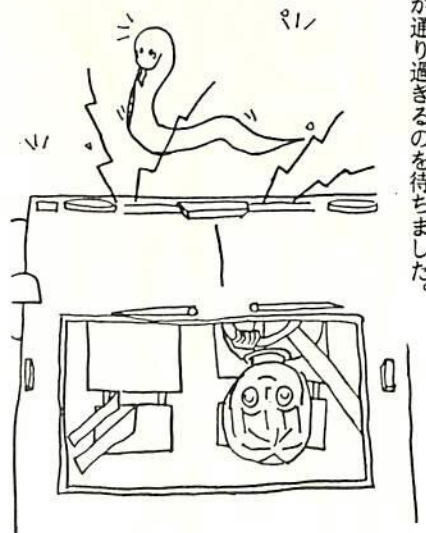
と言って、その都度、ブレーキを踏んで徐行し、クラクションを鳴らし、ヘビが通り過ぎるのを待ちました。

へびだって同じ地球の生き物さ、暑いから出てきて車と衝突では可哀想です。

「お互いに邪魔にならないように生きていこう。」と呼びかけました。

それがネコならもっと大変です。しかも、目の前でひかれるのを見てしまつて、大地君は辛かったらうね。そして、それがどこのネコとも分からず、血の付いたネコを箱の中に入れてやるなんて誰にでも出来る事ではありません。この私だってできやしません。

時折、犬や猫が死んで道路に横たわっていますが、恥ずかしい事に、



5年 羽原美恵子

(誰が始末するのかな。)

位にしか考えていませんでした。

我が家もこの夏から猫を飼いました。その猫は映画の子猫物語のチャトランそっくりの茶色のトラ模様で、しかも、オスというところが気に入ってか、子供が拾ってきました。自転車にひかれたらしく、ビッコをひいていて、目も耳も大きく、体はやせていて腹の部分が異常にふくらんで誰が見ても栄養失調と分かります。

すぐに缶詰をやるよ、

「うわん、うわん」

とがむしやらに食べたので、そこに居合わせた者はみんなどっと笑ってしまいました。最近よく見てみたら、FS映画のグレムリンにも似ています。

とにかく、猫嫌いの私は、子供に「可愛いから抱いて」とむりやり膝の上に置かれると、あたたかい固まりの様で気持ちが悪く、今にも放り出した程でした。その猫も冬の今では丸々と三倍位になっています。

私は、子供が学校へ行った後は一人じめにし、抱き上げたり腹の柔らかな毛に顔を埋めて、一日に一度は「うーん、いい匂い。」とするまでに変わりました。あれ程嫌いだったのに飼ってみるとこれまた可愛いものです。

毎日、庭の虫たち(例えば、つい先ごろまで弱っていたトカゲやトンボ、ミミズ)と遊んでいたけれど、子猫もやがて時期がくれば速くへ出かけることになるでしょう。それは止められやしません。そんな時、家の猫がひかれたらと思うとゾッとします。果たして、ダンボール箱に入れてやるのでしょうか。家の猫じゃないと、知らん顔してしまうかもしれません。

鈴木大地君、本当にありがとう。ネコはきつと先生もおっしゃったように天国へ行けたと思います。そして、君の事、これから交通事故から守ってくれると思います。

いつまでも優しい心の持ち主でいて下さいね。

三、羽ばたけ、上地っ子

若松東 宿谷 里幸

「おばさーん！おばさーん！」

遠くの方で声がする。振り返ってみると、S子ちゃんが大きく手を振っています。私も大きく手を振ります。

子ども会の世話をするようになってから、何度となく、こんな体験をするようになりました。その子ども会の任期も残り少なくなり、沢山の子どもたちと知り合い語り合い、いろんな表情の子どもたちに巡りあってきました。

照れて下を向く子、元気よく手を振る子、そばに寄ってきてい

ろいろ話してくれる子、千差万別ですが、その一人ひとりの笑顔

が一番の「宝」。私は、そう感じました。

道で会おうと、必ず声をかけています。

「お帰り。」

「さようなら。」

「自動車に気をつけてね。」

……と。

今では必ず返事が返ってきて、本当に嬉しくなります。

先月のマラソン大会。ここでも、いろいろなドラマがありました。ゴール前、順位が上がらVサインを出す子、又、下がってが



6年 杉山 龍也

っかりした子、どんなに差があっても、走り抜いたお友だち。その友だちに声援をおくるクラスメイト。その様子に胸が熱くなりました。マラソンを通して羽ばたいていく子どもたちの様々なドラマを、もっと多くの父兄の皆さんに見てほしいですね。

さて、走り終えた子どもたちが、

「おばさん、私のマラソン見てくれた？」

と、走り寄ってくる四年生のA子ちゃん。

「おばさん、何年生におしるこあげる？」

と、私の手を握るS子ちゃん。

おかわりをねだるT君たち。おしるこを飲

めない子どもに声をかけると、やっと、「お

もちだけ食べたい。」と言えたA君。私は、

この子どもたちとの会話の中で『声をかける』

『その子の目線で話す』『誉める』『激励する』

等々痛切に、その大切さを感じました。

よく『子どもは親の背中を見て育つ』と言わ

れますが、その親である私たちが毎日をまっすぐ

に生きていかなければと、私は子どもたちから学

んだような気がします。

ある書物の中に、人間の能力は無限と書かれ

ていました。



6年 杉山 龍也

「もうちょっとだ！行けっ！」

お母さんや担任の先生の叫び声に驚きながら、帰って来ました。頬を紅潮させ次々とゴールイン。

- ・心臓が、まだドキドキしてる。だけど、まだ走れるよ。
- ・ああ、疲れた。おしる粉あるでしょう。ああ、よかった。楽しみにしておったもん。
- ・思い切り走ったもん、疲れた！おしる粉！

二位以下を断然離し、一位入賞を果たした小林実君や安藤・小幡両君が肩で息をしながら喜びを語りました。

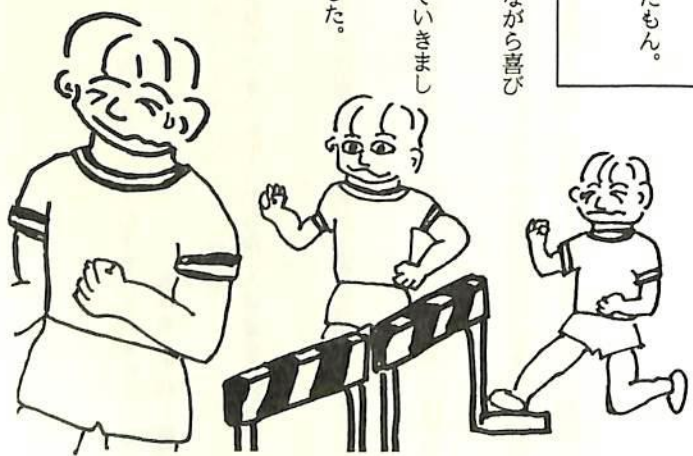
続いて一年生女の子たちのスタートが切られ、上地っ子の意気がグラウンドを圧倒していきまし

た。十時五十分、六年生女子がゴール。一つの事故もなく九百十五人の力走が終わりました。

「おしるこ」一杯飲んじゃった。」

「ぼくは団子を十一個も食べちゃった。」

サンクガーデンでにっこり笑い、五年生の天石君たちがお腹をさすっています。



6年 杉山 龍也

四、私の好きな言葉

「夢・背伸び・」

若松東 市村 敏道

P T A会長の任について二か年が過ぎようとしています。この間、いろいろな方々とお話ができ、先生方とも親しく言葉を交わすことができ、気が知れた役員同志で苦勞を分かち合うことができました。

これらの事が私自身にとって、かけがえない経験となり収穫になりました。ボランティア活動は個人的利益を伴わないものですから、人と人のつながりが柔らかで前向きなものになることを身をもって体験致しました。

P T A会長の仕事で時々学校を訪れるようになってから、私は先生方の行動を大変興味深く眺めるようになりました。世間一般の会社勤めの人たちは、かなり人種が違うように思われました。

先生方は皆、教員という仕事を天職としておられます。そのためでしょうか。時間を忘れて子どもたちのために明日の準備をされたり、日曜日でも部活の指導に当たられたり、子どもたちの安全のために登校指導をされたり、全く頭の下がる思いの連続でした。これは、何でも、お金の換算する世間の風潮の中では信じられない別世界でありました。

夢

さて、私の好きな言葉の一番目は、中田ドラゴンズ星野監督と同じ「苗夕」です。入学前の子どもたちは身近なところに夢を求めます。「バスの運転手」「看護婦さん」「保育さん」等々。

そして、学校に入って少しずつ世の中のことを知るにつれて夢は変化します。「宇宙飛行士」「アイドル歌手」「ノーベル賞受賞博士」等々。

しかし、上級生になり、中学生になるにつれて子どもたちの夢はついに消えてしまいます。これは、子どもたちが世間の事柄をほとんど理解することができ、その中途半端な知識で自分の限界を意識してしまうからではないかと思えます。

子どもたちに夢を持ち続けさせ、その実現に向けて努力させることは親としての大切な役割だと思えます。ところが、子どもが上級校進学を迎えると、世の中の仕組みは夢を優先させてはくれません。

学力優先は教育産業の大企業化を促し、教育産業からの政治献金は現状の学歴社会を温存します。それでも、現実がこのような世の中である事は親である私たち自身の責任ではないでしょうか。

背伸び

「背伸び」という言葉も私は好きです。届きそうにない夢でも、背伸びすれば届きそうになります。届きそうになれば、元氣も出てきます。背伸びする氣力を子どもたちに与えることができれば、親としては本当にうれしいものだと思います。子どもが小学校から中学校へ、高校へと進学するにつれ、親の悩みも大きくなります。

けれども、子どもが一所懸命努力したとしたら、結果はともかくとして、その過程をほめてあげられるような親でありたいと思っています。

今年度のP T A活動への皆様方のご協力やご支援に心からの感謝を申し上げますながら、日頃の雜感を記させて頂きました。本当に、ありがとうございました。

あとがき

ここに「続ふるさと上地」の発刊をみるようになりました。いろいろと親切にお教えいただきました各位に厚くお礼申し上げます。私たちは、この冊子を作るにあたり、

- 一、手づくりであること
 - 二、足で調べたり書いたりしたものであること
 - 三、できるだけ子どもにも参加してもらおうこと
- などを考えて進めてきました。

しかし、微力のため、調査不足や誤りもあろうかと思えます。その節は遠慮なく指摘していただければ幸いです。そして、次の機会にはより充実したものにしたいと存じます。

この冊子によって、わが郷土上地のよさを再認識していただき、すばらしいふるさとづくりのため、少しでもお役に立てば編集に当たった者としてこれに勝る喜びはありません。

岡崎市立上地小学校教務主任 松原 暁三

表紙題字は本校の高橋由美子教諭によります。

研究同人

嶋田 稔	柴田 誠	松原 暁三	佐野 佳三	三津井秀夫
清水 宏	川尻美智子	金子 喜子	守山 妙子	青木 純
中根美恵子	鈴木 尚子	小林 明子	太田 恭子	土屋 恵子
岡本きみ糸	高橋由美子	満本 妙子	渡辺 修	松本 博子
酒井 幾子	松野加代子	名倉 嘉章	青山 静夫	杉本 峰
鶴田 秀幸	河合 友子	田中 鉄也	近藤 八穂	稲垣たかみ
今枝 弘子	奥平 晶子	可知喜久子	加藤 勝彦	岡 恵美子
永坂 治子				

続ふるさと上地

発行日 平成元年3月15日
発行者 岡崎市立上地小学校
校長 嶋田 稔
岡崎市上地町欠ノ下15-1
電話 (0564) 53-0501
印刷所 ブラザー印刷株式会社

